

純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part XIV



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

目 次

1. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その1	2
2. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その2	3
3. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その3	4
4. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その4	5
5. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その5	6
6. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その6	7
7. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その7	8
8. 「ロータリーの目的」 その1	9
9. 「ロータリーの目的」 その2	10
10. 「ロータリーの目的」 その3	11
11. 「ロータリーの目的」 その4	12
12. 「ロータリーの目的」 その5	13
13. 「ロータリーの目的」 その6	14
14. 「ロータリーの目的」 その7	15
15. 「ロータリーの目的」 その8	16
16. 「ロータリーの目的」 その9	17
17. 「ロータリーの目的」 その10	18
18. 「ロータリーの目的」 その11	19
19. 「ロータリーの目的」 その12	20
20. 「ロータリーの目的」 その13	21
21. 「ロータリーの目的」 その14	22
22. 「ロータリーの目的」 その15	23
23. 「RYLA・その理論と実践」 その1	24
24. 「RYLA・その理論と実践」 その2	25
25. 「RYLA・その理論と実践」 その3	26
26. 「RYLA・その理論と実践」 その4	27
27. 「RYLA・その理論と実践」 その5	28
28. 「RYLA・その理論と実践」 その6	29
29. 「RYLA・その理論と実践」 その7	30
30. 「RYLA・その理論と実践」 その8	31
31. 「RYLA・その理論と実践」 その9	32
32. 「RYLA・その理論と実践」 その10	33
33. 「RYLA・その理論と実践」 その11	34
34. 「リーダーの心」第37回RYLA総括	35

序にかえて

毎年、ロータリー新年度を迎えると、3分間情報「純ちゃんのコーナー」の一年間を顧みることになります。将に光陰矢の如し、竹中秀夫会員の発想によって始まったこのシリーズも、早くも14年の歳月を閲しました。

今年度は、クラブ会長山地秀俊会員が会長報告で、経済学のバイブル「国富論」のアダム・スミス教授の考え方を解りやすく解説され、それとロータリーとの関係を説かれたものでありました。元来、体系的な論考を毎週の会長報告という短い時間に纏めながら説くことは難しいことではありますが、私達に解りやすく解き明かして下さったことは、真に有り難く素晴らしいことのでありました。このような論説は、伊丹クラブの品格を高める糧となりますので、何かの機会に、出来れば一冊の記録として纏めていただきたいものと思うのであります。

翻って、小生の「純ちゃんのコーナー」の方は、「国際ロータリーと中間管理組織体」を7回、「ロータリーの目的」を15回、「RYLA・その理論と実践」を11回（未完）にわたってお話申し上げました。

このうち「国際ロータリーと中間管理組織体」は、国際ロータリーの組織原理を理解するためには避けて通れない問題ではありますが、従来、殆どのロータリアンが関心を持っていなかった問題であります。この問題は、1914年、アメリカのヒューストン国際大会で成立したRIBI（Rotary International in Great Britain and Island）を淵源とするロータリー組織論における重要課題ではありますが、爾来、101年を経過した現在、未だに最終的な解決を見ていない問題でありますので、「日満ロータリークラブ連合会」の成立とその終焉に関連して触れておきました。

また、「ロータリーの目的」は、従来、「ロータリーの綱領」と謂われていたものであります。ロータリアンにとって一番大事なものでありますので、記憶整理のために改めて紹介した次第であります。

また、「RYLA・その理論と実践」は、最近、国際ロータリーが従来の「新世代奉仕」を「青少年奉仕」と改め、次世代の若者達を育てることを重視していますので、この機会にその概要を申し述べた次第であります。なお、この論考は次年度にも引き続いてお話申し上げたいと思います。

なお、巻末の「リーダーの心」は、昨年11月3日に亡くなられた元RI理事の今井鎮雄先生の偉大なリーダーシップを偲んで、今年の5月、小豆島の余島で開催された第37回RYLAの総括講義としてお話申し上げたものであります。

最後に、この一年間、私の話を根気よく聴いて下さったクラブの皆さん方の友情と、寛容に心からなる感謝を申し上げますと共に、この小冊子の発刊に御尽力を賜りました竹中秀夫会員、委員長の村上功会員をはじめクラブ事務局の吉永恵子さんに心からなる感謝を捧げてペンを擱きたいと思ひます。有り難うございました。

深川 純一

1. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その1

最近の国際ロータリーの動向は、ロータリーの本来あるべき姿から乖離しているように見受けられます。それは、具体的にはどうということか、と申しますと、ロータリーというものは、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」と謂われていますように、本来、クラブ例会で奉仕の心を作るところであります。そして、作られた奉仕の心を社会で実践するのでありますが、ロータリアンは、職業人でありますから特に職業奉仕を重視してきたのであります。

ところが、最近の国際ロータリーは、職業奉仕を軽視し、世界社会奉仕やロータリー財団を重視して、会員増強と寄付金の増額に奉仕の重点を置いているように見受けられるのであります。そこで、心あるロータリアンは、最近の国際ロータリーの動向に疑念を抱き始めたのであります。

そこで、最近、日本のロータリーは、職業奉仕を中核とした本来あるべきロータリー運動を展開するべきではないかという声を時々耳にするようになったのであります。それは具体的にはどうということかと申しますと、日本のロータリークラブ群のみからなる地域単位の連合体を作ろうということ、詰まり、国際ロータリー（R I）の組織の中にR I B Iのような中間管理組織体を作ろうということでもあります。

しかし、このような中間管理組織体を作ろうという気持は解るのでありますが、国際ロータリーの中に中間管理組織体を作るということは、ロータリーの組織原理に反することなのであります。

では、現に、国際ロータリー・R Iの組織の中にR I B Iが存在しているのは一体

何故か。勿論、これは、ロータリーの組織原理に反することなのであります。

そこで、先ず歴史の話をしておきます。

1910年に当時アメリカに存在した16のロータリークラブをもってロータリークラブ全米連合体を作りました。

その翌年の1912年、イギリスにもダブリンやロンドンを始めロータリークラブが出来ましたので、ロータリークラブ国際連合体と名称を変えました。これが後に至って 国際ロータリー・R Iとなるのであります。

ところが、その2年後の1914年のヒューストンの国際大会において、イギリスとアイルランドのロータリークラブ群からの提案として、「ロータリーはアメリカで発祥したが、イギリスはアメリカの母国であり、イギリスにはイギリス独自のロータリーがあつて然るべきものであるから、イギリスとアイルランドのみから成る地域単位の連合体を認めて欲しい」という提案があつたのであります。

その当時、ロータリークラブ国際連合体は、1912年に発足したばかりであり、組織原理の理解も未だ充分に出来ていなかったもので、イギリスのクラブ群からの提案に対して、それは結構なことである、として簡単に承認してしまったのであります。

これが所謂「R I B I」誕生の由来であります。

2. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その2

前回は、「R I B I」誕生の由来について申し述べました。

これは、原理的には一体何を意味するか、と申しますと、ロータリークラブ国際連合会の組織の中に中間管理組織体を承認したことを意味するのであります。

では、その結果、どのようなことになるのか、と謂いますと、連合会の財務管理の面では、R I B I傘下のクラブ群からの人頭分担金収入は、全てR I B Iに入ることになり、ロータリークラブ国際連合会には一銭も入らないこととなります。また、連合会の理論管理の面では、ロータリーの奉仕理念の追究はR I B I独自の理念で追究することも可能となります。したがって、連合会の理念に反するような提唱が出てくるかもしれません。更に、連合会の情報管理の面でも、R I B I傘下の各クラブからの情報が連合会へ届かないことにもなります。

そこで、ロータリークラブ国際連合会は、R I B Iを承認した後で、これは拙いことをしたと気がついたのであります。そこで、直ちに翌1915年、地区制度を設定して、各地区に連合会の役員としてガバナーを一人おいて、地区内クラブ群の管理に当たさせたのであります。

そして、R I B Iに対しては、その解体を要請したのでありますが、R I B Iとしては既得権を持っていますから、中々これに応じなかったのであります。

その後、1957-58年度に財務管理の人頭分担金の問題は解決したようですが、人事権については、R I B Iは頑としてその名跡を譲りませんから、未だに、ロータリークラブ国際連合会（今のR I

の役員として、R I B Iの会長、副会長、事務総長などが入っているのであります。このことが国際ロータリーの組織管理上好ましくないことは明らかなのであります。したがって、ロータリーの組織原理としては、当初、連合会が創立されたときのように、各ロータリークラブは、連合会に直結する。そして、ロータリーの理論管理、財務管理、情報管理は、連合会が一手に集約して行うべきであったのであります。

ところが、1914年当時の連合会の原理認識が甘かったために、一つのハプニングとしてR I B Iという中間管理組織体が生まれてしまったのであります。

実は、このようなハプニングは、日本のロータリーにもありました。それは一体何かと申しますと、戦前の1939年、昭和14年に創立された「日満ロータリークラブ連合会」であります。これは、将に国際ロータリーの中の中間管理組織体でありました。では、何故、このような中間管理組織体を作ったのか。

当時は、日本の政治権力が軍閥に握られていまして、軍閥は、何れはアメリカと戦争をしなければならないと考えていました。このような、日米感情が悪化するムードの中で、ロータリーがアメリカに直結しているという印象を与えるのは如何にもまずい、というので、R Iから離脱する訳にはいかないが、R I B Iのように、R Iから一歩退いた中間管理組織体を作ったのであります。

3. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その3

前回は、曾て日本にも中間管理組織体が存在したことを申し上げました。それが日満ロータリークラブ連合会 Rotary International Japan & Manchuria (RIJM) であります。戦前の1939年、昭和14年から昭和15年にかけて約1年半の短期間ではありましたが、厳然と存在したのであります。

1939年6月のクリーブランド国際大会の第9号議案として、日本のR I 第70地区のR I J M案が提案されていたのであります。これは、R I B I に倣って、Jは日本、Mは満州を表していたのであります。

この第9号議案が国際大会に先立って行われた立法委員会にかけられたとき、提案理由説明者の芝染太郎氏によって撤回されたのであります。

その理由は、芝染太郎氏が、ロビー活動で非公式に個々の理事の意見を聞いたところ、賛成は、アルゼンチン、ブラジル、ペルーなどの南米諸国だけであり、彼等は、日本の提案に便乗して、出来れば自分のところもと考えているらしく、このようなことになると、国際ロータリーの組織の根幹を揺るがす問題となることに気付かしまして、アメリカの理事の必ず善処するという約束を信じて、自ら撤回したのであります。

実は、この中間管理組織体の問題は、その後、1983年の国際大会に至ってその第1号議案として、ラテンアメリカ Ibero America にR I の地域単位 Region を設ける件として提案されているのであります(83-1)。

これは、R I B I の地域単位 Region と同様に、R I の新たな地域単位をラテン

アメリカに認めようとするものでありまして、1939年のR I J M提案当時から燻っていた休火山が火を噴いたものと考えられるのであります。

この提案の趣旨は、取り敢えずは地域単位 Region を Ibero America の中に作れという提案であります。これは中間管理組織体を目指しての二段ロケットの第一段と考えられるのであります。勿論、この提案は否決されています。

話を日満ロータリークラブ連合会R I J Mに戻します。国際ロータリー理事会は、芝染太郎氏との約束通り日本の希望を入れて、昭和14年、1939年度から日本のR I 第70地区を3地区に分割し、更に、その3地区の連合会を作ることを黙認して、自治地域の適用を許したのであります。このようにして、連合会の承認は、黙認ではあります。厳然として存在したのであります。

勿論、国際ロータリーは、正式にはこれを認めなかったのであります。日本のロータリーは、芝染太郎氏の政治的な裏取引によってこれを押し切ってしまったのであります。

元来、中間管理組織体が原理的に認めることが出来ないものであることは、前回申し上げたところであります。ロータリーも神ならぬ人間の世界である以上、ハプニングのあることもまた止むを得ないことであると思うのであります。

4. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その4

前は、国際ロータリーが日満ロータリークラブ連合会 R I J M を中間管理組織体として、不承不承の黙認ではありましたが承認したことを申し上げました。

そこで、1939年6月13日、R I 理事会によって認められた内容は、日本の R I 第70地区を三地区に割って、本州の名古屋以東の東部と北海道の20クラブをもって第70地区とし、本州の西部、四国、九州、台湾の19クラブをもって第71地区とし、そして、朝鮮、満州の3クラブをもって第72地区とするものであります。そして、その細目は次の通りであります。

第1 3地区の総括機関として日満ロータリークラブ連合会を組織し、会長1名、ガバナー3名、前ガバナー3名、前会長1名合計8名の委員を置く。

第2 会長は、R I の承認を要せず委員会が選任し、委員の任期は1年とする。

第3 会長の選出は、3地区連合大会でこれを行う。

第4 ガバナー選挙は、地区大会で行い、R I へ通告し、国際大会で選出される。

第5 ガバナーの任務は、従来と変わるところはない。

第6 R I へ送金する人頭分担金、4 \$ 50 セントは、半額は、連合会に残して、その費用に充てる。

第7 以上を1939年7月から実施する。

というものでありまして、このようにして、8月26日、第70地区協議会が開催され、9月15日、新規約が制定されたのであります。

そして、連合会の各ガバナーの選任は、次のとおりであります。

第70地区は、東京クラブの森村市左衛門氏
第71地区は、京都クラブの大沢徳太郎氏
第72地区は、大連クラブの貝瀬謹吾氏
そして、10月9日、連合会会長に米山梅吉氏が選ばれて就任し、日満ロータリークラブ連合会を統括することになったのであります。

さて、第1回の日満ロータリークラブ連合会年次大会は、昭和15年、1940年5月5～6日、横浜会館において開催され、出席者は542名でありました。

この大会で連合会会長に米山梅吉氏が再選され、ガバナーノミニエの選出は、第70地区は平沼亮三氏（横浜）、第71地区は岡崎忠雄氏（神戸）、第72地区は篠田治策氏（京城）が、それぞれ選出されています。

大会決議としては、皇軍に対する感謝や傷病兵の慰問等について決議があり、

また、前夜研究会は、横浜銀行クラブで開催されましたが、ここでは、

1. ロータリーの綱領の翻訳を改めること。
2. 日本の国号をニッポンと呼ばせること。
3. 蒙古、北支方面へロータリーを拡大すること。

などが論議されたのであります。

5. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その5

前回は、第1回日満ロータリークラブ連合会年次大会が1940年、昭和15年5月5～6日、横浜において開催されたことを申しあげました。懇親晩餐会は、横浜のニューグランドホテルで開かれ、ビクター専属歌手、渡辺はま子らの歌もあって、時節柄、質素ではありましたが、楽しく行われたと謂われています。

そして、次の大会開催地は大阪と決定されたのでありますが、やがて日本のロータリーは、国際ロータリーを脱退したため、この大会が最初にして最後の大会となったのであります。

以上を要するに、日満ロータリークラブ連合会は、1939年、昭和14年7月から発足しましたが、陣容を整えて発足したのは、9月末であり、その後の期間も短く、したがって、国際ロータリーとの関係については、当時の各クラブ会員に徹底されていなかったようであります。

当時、既に、ロータリークラブに対する干渉や弾圧が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も、予め警察に届け出なければならなくなって、クラブもその精彩を失ってしまったのであります。

昭和15年、1940年7月にロータリーは新年度となり、8月10日に予定されていた岐阜における地区協議会に向けて、各クラブでは色々と質疑や提案について協議したのであります。

クラブによっては、議論が沸騰し、過激な意見も出ましたが、静岡クラブその他で解散の声まで聞こえて来ましたので、連合会では、岐阜の地区協議会をひとまず延期

すると共に、全クラブに対し、8月8日、国際ロータリーとの関係を明らかにする通知書を送ったのであります。

当時、海外の状況はどのようなものであったか。既に、昭和12年、1937年には、ドイツの42クラブは、ナチスの弾圧によって解散させられ、昭和13年、1938年12月には、オーストリアの11クラブ、イタリアの34クラブも解散を命じられていましたので、早晩、日本でも同じ運命が予測されていたのであります。既に昭和9年、1934年のデトロイト国際大会では、やがて日本のロータリーが国際ロータリーを脱退するであろうと報じていたのであります。

では、日本の状況はどのようなものであったか。昭和15年、1940年8月8日、静岡クラブが何らの討議をすることなく真っ先に解散しました。このことが戦後、国際ロータリーへ復帰するとき難航する原因となったのであります。

次いで、8月12日、大阪クラブが解散決議をしました。その趣旨は、軍閥の弾圧による解散に先んじて、自発的に国際ロータリーを脱退し、ロータリーの名称をなくする代わりに、その精神、綱領、組織などをそのまま維持温存する方がよい、という意図によるものであります。これは、村田省蔵パストガバナーの国粹主義的なロータリー観の影響も多少はあったと思われるのであります。

6. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その6

前回は、昭和15年、軍閥の弾圧によって静岡クラブ、大阪クラブが相次いで解散決議をしたことを申し上げました。それに続いて8月19日、岡山クラブが解散決議、更に、8月21日、京都クラブが解散決議をしました。

しかし、京都クラブは、解散決議までに、解散派（国粋派）と存続派（国際派）の二派に分かれて、解散派は、大丸で木曜日に例会を開き、存続派は、従来通り水曜日に京都ホテルで例会を開いていたのであります。

そして解散後、京都クラブは、11月に大沢徳太郎氏を会長として、解散派、存続派両派が合流して京都水曜会に統一したのであります。

ところが、この時、あくまでもロータリーの国際性を主張して、この合流に加わらなかった人が2名居ました。その一人がロータリーソング「奉仕の理想」の作詞者前田和一郎氏でありました。

東京クラブでは、8月14日、例会において解散か否かについて討議が行われるというので、杉村楚人冠氏は、病を押して出席し、『ロータリーの如き意義ある団体が、周囲の浅薄な意見に押されて解散するが如きは絶対反対。むしろ、この際、ロータリーの理想の公明正大なるを宣言して、国から解散を命ぜられない限り、あくまで存続を図るべし』と主張しました。

この日には、日満ロータリークラブ連合会の委員会も開かれ、文部大臣平生釵三郎氏のほか、地方から上京してきた各クラブ代表をも加えて22名が協議した結果、米山梅吉氏が内務大臣と外務大臣に会い、芝染太郎氏が憲兵隊に当たって、その見解を

質した上で、更に、もう一度協議して対策を立てることになったのであります。

そして、各クラブに対しては、『日満ロータリー連合委員会に於いては、このまま存続するに決した。ロータリーの精神には疑問の余地なきものと信ずるも、なお、その筋の意向を確かめんとする』と打電して、軽拳妄動を戒めたのであります。この注意の伝達は、更に、8月20日にも行われ、『日満ロータリー連合会を更に国家単位に改組することを国際ロータリーに提案し、その実現を見るまでは、国際ロータリーとの関係を一時停止する。

もし、容れられない時は、国際ロータリーから脱退すると言う線で組織改正案を取りまとめ中である』と謂うことが付け加えられたのであります。

ところが、連合会長米山さんが軍当局に呼び出され、ロータリーの組織機構は、日本帝国に対する反逆である、と極言せられ、更に、静岡、大阪、京都をはじめ地方のクラブが続々と解散、離脱に踏み切りつつあるという状況でありましたため、全く統制がとれなくなり、遂に、日満ロータリークラブ連合会も9月4日の委員会で国際ロータリーからの離脱を決意し、連合会を解散し、これに代わって国家単位の新しい団体を組織することを決定したのであります。

7. 「国際ロータリーと中間管理組織体」 その7

前回は、日満ロータリークラブ連合会が国際ロータリーから離脱して連合会を解散し、これに代わる国家単位の新しい団体を組織することを決定したと申しました。そこで、芝染太郎幹事は、9月5日付け書面でその旨を各クラブへ通知しています。この日満ロータリークラブ連合会に代わる新団体の結成については、創立委員25名が指名され、その中から小林雅一、露口四郎、宮脇富、石川芳次郎など7名が起草委員となり、標準クラブ定款も出来、名称も【七曜倶楽部連合会】と決められたのでありますが、太平洋戦争を目前にして、各クラブではそれぞれどころではなくって、結局、この【七曜倶楽部連合会】は、文字通り有名無実となってしまったのであります。

このようにして、日本全国のクラブが次々に解散し、最後に9月11日、遂に東京クラブが解散することになりました。そして日本ロータリーの創立始者米山梅吉先生が東京クラブの壇上に立たれました。『重い足を引きずって私は今ここに立つ。こんなつらい気持ちで皆さんに話さねばならないのは、20年来初めてである。私はただ、かかる結末になったことをお詫びしたい。』

日本国中のロータリークラブが一致団結しているならば兎も角、このように散り散りになっては、最早手の施しようがない。ここはひとまず解散をして時の来るのを待とう。

創立以来の20年を顧みるとき、誠に感慨無量である。この間、ロータークラブが如何に国家社会に貢献して来たか、その歴史は燦として輝いている。私の眼底には、絵巻物の如く、それらが彷彿としてくる。

私はただ、皆様に御礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい』と挨拶されて壇上から降りられたのであります。これが日本のロータリーが軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿でありました。

では、それでロータリーがなくなったのか、と言いますと、ロータリーという組織は壊滅しましたが、ロータリー運動はなくなりませんでした。戦後、日本ロータリーが復活するまで従来通りの例会活動が続けられたのであります。それは一体何故か。ロータリー思想が優秀であったが故に、ロータリーに魅力があったからであります。

何はともあれ、日満ロータリークラブ連合会 R I J M という中間管理組織体は消滅しました。しかし、その存在は、ロータリーの組織原理に反したものではありませんでしたが、それは軍閥の弾圧を避けてロータリー運動を守りきるためであったという意味において、それなりの存在理由がありました。

ところが、R I B I という中間管理組織体は、未だにその役員を国際ロータリーの組織の中に送り込んでいるという意味において、ロータリーの組織原理に違反しているにも拘わらず、完全には、その存在を消し去ってはいないのであります。ここにアングロサクソン民族の強さを看取ることが出来ると思うのであります。

8. 「ロータリーの目的」 その1

今回からは、「ロータリーの目的」についてお話し致します。「ロータリーの目的」というのは、昨年度までは「ロータリーの綱領」と謂われていたものでありまして、ロータリーとは何かということを簡明直裁に書き上げたドキュメントであります。これは、般若心経が僅か262文字をもって、仏道とは何かということを説き明かしていますように、ロータリーの目的は、英語で僅か100文字、日本語でも非常に簡潔な文章をもってロータリーの原理体系を集約しているものでありまして、ロータリーの思想、組織、そして実践の原理を簡潔に集大成したものであります。将にこれは、ロータリーの中核を為すドキュメントでありまして、ロータリーにおける般若心経ともいえるべきものでありますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していなければならないものなのであります。

このようにロータリーの目的は、ロータリアンにとって、一番大事なものであるとあります。したがって、ロータリーの目的を知らずしてロータリーを語ることなかれ、と謂われるように、ロータリーの目的を知らなければロータリアンとは謂えないのであります。

そこで先ず、ロータリーの目的の歴史の話から入りたいと思うのであります。

ロータリーが始まって5年後の1910年、当時、アメリカにあった16のロータリークラブが集まって全米ロータリークラブ連合会という連合組織体を作りました。これが後に至って 国際ロータリーとなるのであります。ところが、その当時、全米ロータリークラブ連合会の定款の中には、

ロータリークラブの目的と連合会の目的とが別々に書かれていたのであります。

そこで、1915年、クラブの目的と連合会の目的が別々であるのはおかしい、これは一つのものでなければならぬ、というので、両方の目的が合流するという形で作業が進められまして、原理的に見て今日と殆ど同じようなロータリーの目的が出来上がったのが1922年のロサンゼルス国際大会の時でありました。時恰も標準ロータリークラブ定款の採択が全世界のロータリークラブに法的に義務付けられた時でありました。将にその標準クラブ定款の中に原理的に見て今日と同じようなロータリーの目的が定められたのであります。

そして、その時に6ヶ条であったものが、職業奉仕のところは2ヶ条つめられて、4ヶ条になったのが1935年のメキシコ国際大会の決議でありました。

但し、その時、ロータリーの目的は、The objects of Rotary ロータリーの諸目的という形で複数形になっていたのであります。ロータリーの目的は、一つであって、その一つの目的の発現形態が四つに割れるのであるから、これは複数形であってはならない、と謂うので長い間議論されて、結局、1951年のアトランティック・シティの国際大会の議決によって、現在と同じ形の単数形、即ち、The object of Rotary ロータリーの目的になったのであります。

9. 「ロータリーの目的」 その2

前回は、ロータリーの目的は、1951年のアトランティック・シティの国際大会の決議によって現在と同じ形になったと申しました。

ただ、原理的に考える限りにおいては、それより29年前の1922年の時点に於けるロータリアン達が、「ロータリー斯くあるべきものとする」と考えたことが現在の「ロータリーの目的」になったと考えてよいのであります。

このように、ロータリーの目的は、ロータリアンが何十年もかけてロータリーの本体を見つめた結果出来上がったものであり、全世界のロータリアンの知性を結集した国際大会の議決でありますから、ロータリーの表現の中では最も優れたものと謂えるのであります。したがって、ロータリアンは、平素、個人的に奉仕を行い、「ロータリーとは何か、ロータリーとは何か」と自らの心に問い掛ける場合には、この「ロータリーの目的」を日夜暗誦すべきであります。これをよく見つめることを通じて自分の心を反省しますと、ロータリーとは何か、ということが自ずから理解出来るようになるのであります。

さて、歴史の話に次いで「ロータリーの目的」の具体的な内容の話に入ります。

ロータリーの目的は、二つの部分から成立っています。即ち、一つは、ロータリーを一言でいえば何か、ということを書いた部分でありまして、これが本文であります。ただ、本文は、ロータリーを一言で定義したものでありますから、非常に抽象的であります。したがって、幾通りにも解釈されることがあり、実質的な意味内容が千差万

別なものになりますので、これを補強する項目を四つ、第1から第4まで4項目を付け加えているのであります。

そこで先ず、ロータリーの目的の本文の規定は、手続要覧によりますと、『ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には次の各項を奨励することにある』と規定されています。一読して、解り難いことが判ります。

この手続要覧の原典は英文でありますから、この翻訳では少し解りにくいので、私は、この規定の翻訳としては、中央大学の小堀憲助先生の翻訳に従っております。それによりますと、『ロータリーとは、企業の根底に奉仕を置くべしとする理想を提唱することを目的とするクラブ活動のことをいう』と謂うのであります。ここは重要なところでありますので繰り返して申しますと、『ロータリーとは、企業の根底に奉仕を置くべし、とする理想を提唱することを目的とするクラブ活動のことをいう』。

この中で、『企業の根底に奉仕を置く』というところが中心概念であります。実は、資本主義経済社会においては、企業の目的は、「利潤の追求」であります。したがって、企業の根底には「儲け」があるわけであり、企業は、儲けなくして生きていくことは出来ませんから、これは当然のことです。

10. 「ロータリーの目的」 その3

前は、「ロータリーの目的」の中心概念は、『企業の根底に奉仕を置く』ということですが、資本主義経済社会においては、企業の目的が「利潤の追求」にあるため、企業の根底には「儲け」があるということを申し上げました。

では、ロータリーは、企業の根底に奉仕をおくと謂って「儲け」を否定するのか、と謂いますと、否定はしないのであります。ここところが肝心なところでありまして、もし、「儲け」を否定しますと、ロータリーは、或る種の宗教団体のような非常に倫理的統制の強い団体になってしまいます。

そこで、ロータリーは、企業の根底に「儲け」があることを認めた上で、それでは、「儲け」とは一体何か、と考えるわけでありまして、ここところが大事なところでありまして、企業の根底には「儲け」があるということについては間違いありません。

しかし、例えば、百円のを仕入れて、これを百万円で売ったとすれば、そのような利益をロータリー的な意味での「儲け」、利益と謂えるのか、という問題があります。これは、明らかに「暴利」であります。したがって、商売をする以上、商人もやはり儲けなければ幸せな人生を築くことは出来ませんが、それには限度がありまして、適正な利潤を超えて儲けてはならないのであります。したがって、商人は商人で儲かって幸せになるが、しかし、顧客もその商品を買って幸せになる、という両者の調和点が何処かになければなりません。これを抽象的な表現で表しますと『利己と利他との調和』ということになるのであります。

ロータリーの奉仕というのは、実は、こ

のことを謂うのであります。商人は、代金「儲け」を受け取って幸せになるが、顧客も商品を受け取って幸せになる、という双方のバランスをとる一点というものが必ずある筈であります。このようにして、いつも、その調和を求めていきますと、一つの取引を通じて、目に見える『商品と金銭の交換』だけでなく、目に見えない『満足と感謝の交換』が行われる。つまり、お互いに小さな信頼関係を交換することが出来るようになるのであります。

そして、商人が長年に亘って、この営みが続けて行きますと、地域社会に信用というものを築くことが出来るのであります。そして、信用のある商人が栄えるということは、その反射的効果として、地域社会全体もまた栄えることを意味するのであります。この点を追求するのが、まさにロータリーなのであります。

このようにして、ロータリーの奉仕とは、金持が思い上がって弱者に金を恵むというような次元の低い奉仕を意味するものではなく、ロータリアンが、日常の企業経営の中に利己と利他との調和を本体とする奉仕の考え方を植え付けるものでなければならぬのであります。砕いて謂えば、企業の根底にある儲けの中の「儲けてもよい儲け」を追究することがロータリーの目的なのであります。

11. 「ロータリーの目的」 その4

前は、ロータリーの奉仕とは、金持が思い上がって弱者に金を恵むというような次元の低い奉仕を意味するものではなく、ロータリアンが、日常の企業経営の中に利己と利他との調和を本体とする奉仕の考え方を植え付けるものでなければならないと申しました。

これを要するに、企業経営は利潤追求の営みでありますから、企業の根底には「儲け」があります。ただ、「儲け」の中には、「儲けてもよい儲け」と「儲けてはならない儲け」があるわけがあります。その「儲けてもよい儲け」を追求することがロータリーの目的である、と考えればよいのであります。

Paul P.Harris は、この点をとらえて、「ロータリーは、儲けの金高を問題にするものではない」と言っているのであります。即ち、ロータリーは、儲けた金高ではなく、儲けた方法、即ち、儲け方を問題にするのであります。これが職業倫理に関わってくるのであります。企業の根底に奉仕を置いて職業を営みますと、詰まり、職業を倫理的に営みますと、奉仕を通じて厚い信用に支えられ、利潤、即ち、儲けが長期的に安定的に入ってくるのであります。

これが、かなり即物的な解釈ではありますが、He profits most who serves best『奉仕に徹する者に最大の利益あり』という標語の意味するところなのであります。この標語は、現在、ロータリーの第2の標語になっているのであります。

要するに、ロータリーは、儲け方を問題にします。あくどい儲け方をして、顧客を不幸にするようなことはしない。自分も儲かって幸せになるが、その反射的效果とし

て、顧客も商品を受け取って幸せになる、双方の調和点が必ずある筈であります。この点を基準にして企業経営を行うことが、ロータリー本来の目的である、と謂うことをこの標語は示しているのであります。

そして、このことを言い方を換えますと、『利己と利他との調和』と謂うことになるのであり、この言葉は、1923年のセントルイスの国際大会の決議23-34号第1項に於いて『ロータリーとは、利己と利他との調和を目的とする人生の哲学である』と定義されているのであります。したがって、ロータリーの目的の本文と決議23-34号第1項とは、同じことを謂っているのであります。

以上を要するに、「ロータリーの目的」の本文を一言で謂えば、『企業の根底に奉仕を置くべしとする理想を提唱するクラブ活動のこと』、ただ、それだけのことでありますが、これではあまりに抽象的過ぎて、解釈も様々になり、誤解も生ずることになりますので、この本文を補強する項目を、第1から第4まで4項目つけ加えて、それを通じてロータリーの本体を見つめてほしい、と謂う構成をとっているのであります。

以上がロータリーの目的の本文の概要であります。そこで次回からは、ロータリーの目的の第1から話に入りたいと思います。

12. 「ロータリーの目的」 その5

前は、「ロータリーの目的」の本文の概要を話したので、今日からは、ロータリーの目的の第1の話に入りたいと思います。

まず、手続要覧によりますと、ロータリーの目的の第1は、『知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること』と規定しています。これはロータリーの目的の原典である英文の翻訳であります。このロータリーの目的の第1というのは、ロータリーの中核にある最も大事なところであります。シカゴクラブの創立当初のクラブライフのことを考えますと、「知り合いを広めることによって」という翻訳は、正鵠を射たものではないと思います。このところは、「知り合いを広める」などという程度の浅いものではなく、もっと突き詰めて謂いますと、「心の友を得て」と訳す方がピッタリ来ると思うのであります。したがって、私は、小堀憲助先生の翻訳に従って、この規定を『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』と謂う具合に理解してあります。

これは、ロータリーの奉仕をクラブの内と外に分けた場合のクラブの内の世界、即ち、クラブの中で奉仕の心を作る親睦の規定であります。

この「心の友を得て」という言葉が将に肝心要のところでありまして、単に「知り合いを広める」のではないのであります。

さて、そこで、『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』これこそ純粹のクラブ親睦であると謂うことになるのであります。これを一言で集約してロータリーの理論用語に直しますと、どういうことになるかと申しますと、"Fellowship for

Service"ということになりますのであります。「親睦なくして奉仕なし」と訳してもよいかと思いますが、そのように一言で言い切ることが出来るだろうと思うのであります。

『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』、初期のシカゴクラブのように「心の友を得て」本当の親睦の内に仲良くなって、己の到らざるところを他のロータリアンに学ぶ、そのようにしてロータリアンが毎週例会で学び合ったならば、例会が終わって一歩外へ出れば、奉仕と謂うことは、ロータリアンが自ずから実践することであって、奉仕、奉仕と言わなくてもよい、肝心要の元は親睦だよ、ということなのであります。

要するに、例会出席と親睦、例会に出席しなければ、親睦はありません。そして、その親睦というのは、優れて精神的な親睦であります。例会に出席した会員達が、お互いに己の到らざるところを他の会員から学び合う親睦、お互いに何かのものを学び合うという親睦でなければならないのであります。かりそめにもロータリアンと言われる人達の集まりであります。たとえ一言も喋らなくても、その一挙手一投足が何か人に教えるものを持っているのであります。

そのような人達の毎週一回の会合が将にロータリーの例会なのであります。

13. 「ロータリーの目的」 その6

前回は、「ロータリーの目的」の本文の規定『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』、これこそ純粹のクラブ親睦であり、これを一言で集約してロータリーの理論用語に直しますと、"Fellowship for Service"ということになると申しました。

ところで、私の母校は関西学院であります。この関西学院大学が日本の大学制度の中で主張するスローガンに、"Mastery for Service"という言葉があります。これは、ロータリーの理論用語、"Fellowship for Service"と同じ境地にある言葉なのであります。

その心は、Mastery というのは何かと謂いますと、これは中世ヨーロッパの職人用語でありまして、学理を究めよ、という意味なのであります。即ち、"Mastery for Service"、世のため人のために尽くすためには、先ず、大学で学理を究めなさい、という考え方があります。

そこで、先程のロータリーの理論用語"Fellowship for Service"は、世のため人のために尽くすためには、先ず、親睦が第一ですよ、Fellowship、友情が大事ですよ、ということロータリーは説いているのであります。

そして、そのFellowshipの内容は何か、と謂いますと、それは、優れて精神的な親睦のことなのであります。皆がお互いに学び合う親睦、お互いがお互いに学び合う親睦、そういうものをもってFellowshipといっているわけでありまして。したがって、FellowshipもMasteryも、どちらも「学ぶ」ということを中核にもつ言葉なのであります。そこで、私は、ロータリーの謂

うFellowshipは、関西学院大学のモットーMasteryに通ずる言葉であると理解しているのです。

実は、私は、在学中には、そこまでの理解が出来ませんでした。ロータリーに入ってロータリーの勉強をして、このような原理を身につけるようになって、この二つの言葉はイコールだな、と思いついた次第であります。

さて、そこで、この「心の友を得て」という言葉の具体的に意味するものは何か、と謂いますと、Paul P.Harrisが1905年にロータリーの創立に際して採用した一業一会員制の原則、即ち、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則によって選ばれた良質な職業人が、厳しい経済社会を生きぬいて行くために、企業経営上の知恵を例会に持ち寄り、心を通わせて友情を暖めあう、それが「心の友を得て」ということなのであります。単なる「知り合いを広める」というようなものではなくて、「心の友を得る」のであります。

その心の友を得た親睦の反射的效果として、奉仕というものが自ずから出てくるのでありまして、単なる社交クラブの社交ではないよ、と謂うことを言っているのであります。したがって、ロータリーの親睦というものを感性的に捉えますと、ロータリーの目的の本文の理解が出来ないことになるのであります。

14. 「ロータリーの目的」 その7

前回は、ロータリーの親睦というものを感性的に捉えますと、ロータリーの目的の本文の理解が出来ないことになる」と申しました。即ち、酒を飲むとか、ゴルフをするとかして愉しむことがロータリーの親睦であると考えている人がいますが、そのような感性的な親睦は、地域社会の人であれば誰でも愉しんでいることでありまして、極端なことを謂えば、暴力団でも彼らがグループ活動である以上は、そのような感性的な親睦はあるわけでありまして、したがって、親睦を感性的に捉えますと、暴力団も酒を飲み、ゴルフをします。ロータリアンも酒を飲み、ゴルフをします。では、暴力団の親睦とロータリーの親睦と一体何処が違うのか、ということになります。この点を煮詰めておかなければなりません。

そこで、ロータリーの親睦というのは、そのような感性的な親睦だけではなくて、心の友を得たことが奉仕の契機となるべし、即ち、心の友を得たことが媒体となって、奉仕というものが自ずから出てくるようなものでなければなりませんのであります。

もう少し具体的に謂えば、ロータリーの親睦というのは、ロータリアンがクラブの例会で己の至らざる所を他のロータリアンから学ぶ、即ち、自己研鑽、切磋琢磨によってお互いに学び合う親睦のことなのであります。

ロータリークラブは、お寺ではありません。社交クラブでありますから、ロータリアンは、酒を飲んでもよい、ゴルフをしてもよい、楽しいことは何をしててもよいのであります。ただ一点、忘れてはならないことは、何をするにつけても、某かのもの

を他人に学ぶ心、即ち、己の至らざる所を他人から学ぶ心を忘れてはならないということでありまして。いやしくもロータリアンと謂われる人達であれば、たとえ一挙手一投足であっても、何か人に教えるものを持っています。それをお互いに学び合うのであります。一寸した動作や言葉であっても、流石はロータリアンだ、と教えられることがあります。そのような学ぶ心をもって、酒を飲み、ゴルフをするとかして諸々の楽しいことをすればよいのであります。

このように、ロータリアンがお互いに学び合う親睦、これを感性的親睦に対して、精神的親睦と謂うのであります。これこそロータリーの親睦なのであります。したがって、ロータリーの親睦には、感性的な親睦のほかに精神的親睦があるということをお忘れてはならないと思うのであります。

今から25年前、1989-90年度の国際ロータリー会長ヒューM・アーチャーさんは、『ロータリーを楽しもう』というテーマを掲げました。ところが、このテーマは、随分と誤解されたようであります。それは何故かと謂いますと、『ロータリーを楽しもう』と謂うのであるから、何でも楽しければよい、と思って、酒を飲むとか、ゴルフを楽しめばよいと考えた人が居たようであります。

しかし、それはロータリーを楽しんだことにはならないのであります。

15. 「ロータリーの目的」 その8

前回は、『ロータリーを楽しもう』と謂うテーマについて、酒を飲むとか、ゴルフを楽しむばよいと考えた人が居たが、それは、酒やゴルフを楽しんだことにはなっても、ロータリーを楽しんだことにはならないと申しました。

アーチャーさんの心は何処にあったのか、と謂うと、ロータリアンが毎週例会に集まって、お互いに自分の至らざる所を他のロータリアンに学び合いながら、育って行くのを見るのは楽しいね、このロータリーを楽しもう、と謂うところにあったのであります。詰まり、ロータリーを楽しもうというのは、ロータリーの精神的親睦を意味したのであります。

以上を要するに、ロータリーの目的の第1には、親睦と奉仕の関係について、『心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと』と規定しているのであります。ロータリーの例会は、単なる「知り合いを広める」ところではなく、「心の友を得る」ところではなければならない、と考えるのであります。

Paul P.Harris が1910年にロータリーの本体は親睦と奉仕の調和の中に宿る、と悟ったように、親睦だけではロータリーは成り立たない。さりとて、奉仕だけでも成り立たない。親睦と奉仕が同じ次元になれば、ロータリーというものは生きてこない所以であります。

これを一言で表現しますと、『親睦と奉仕の調和』と謂うことになり、これが、『心の友を得て、もって奉仕の契機と為すべきこと』の全ての意味であります。

以上を要するに、ロータリーの目的の第1は親睦を規定しているのであります。

但し、その親睦は、奉仕と同じ次元に立つ親睦即ち、精神的親睦でなければならないのであります。

次に、ロータリーの目的の第2は、親睦の実質的な内容についての規定であります。これもロータリーの目的の第1と同じく、クラブの内と外に分けた場合のクラブの内の世界、即ち、奉仕の心を作る親睦の規定であります。

ロータリーの本体は、『親睦と奉仕の調和』にある、とは謂いますが、その親睦とは一体何か、それは、お互いに心と心を磨き合うこと、であります。しかし、心と心とを磨き合うと謂うことは、あまりにも抽象的であります。一体どのような心を磨くのか、この点についての明確な回答を与えておかないと、ロータリーというものは、ある種の観念の遊戯になってしまう虞があります。

そこで、ロータリアンは、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る。」という言葉があります。その心とは一体何か。それは、ロータリアンの職業人としての心であります。その心を基にして、企業経営に精を出し、企業経営を通じて色々と苦しみながら試行錯誤を重ねた結果、自分の職種については独自の経営哲学をもっています。

では、その哲学は一体何を通じて作ったのか、と謂いますと、それぞれの職業を通じて作ってきたものなのであります。

16. 「ロータリーの目的」 その9

前回は、ロータリアンは、それぞれの職業を通じて作ってきた独自の経営哲学を持っていると謂うことを申し上げました。しかも、一業一会員制の原則によって、様々な職種が集まっているため、それぞれの哲学が皆異なるわけであります。したがって、発想の交換・アイデアの交換をするには非常に都合がよいのであります。

そこで、それぞれの企業経営を通じて作り上げられたそれぞれの考え方というものが例会で交換されることになるのであります。即ち、大学教授は大学教授の考え方、デパートの社長はデパートの社長の考え方、医者は医者の方を例会に持って来ます。そこで、そのような考え方がお互いに交換されると、その総和として、理想的な企業経営観、職業のあるべき姿というものが例会で交換されることになるのであります。この様々な発想を交換する機能こそ、ロータリーが、創立以来、大切に育ててきた機能なのであります。

ところで、一般的には、その職業のあるべき姿というものは、ロータリー的にはどういう具合に見えるのか、つまり、ロータリーの目的の本文に謂うところの『企業の根底に奉仕を置く』という考え方の基礎に何があるのか、ということになるのであります。ロータリーの目的の第2は、このことについて三つの項目に分けて規定しています。

ただ、この三つの項目については、説明の順序としては、最後の三つ目の項目から逆に3.2.1. と説明する方が解り易いと思います。そこで、先ず、ロータリーの目的の第2の三つ目の項目は、『社会に奉仕す

る機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること』と規定されています。

しかし、手続要覧のこの翻訳では少し解り難いと思います。私は、小堀憲助先生の翻訳に従って、この規定を『自己の職業を以て天職と心得るべきこと』と理解しています。

この天職という言葉には若干宗教的な響きがありますが、これは、自分の職業をもって、利潤を追求するためだけの手段と考えてはならない、職業というものは、惹いては世のため人のためにもまた営んでいるのである、という自覚を持たなければならぬ、という具合に考えればよいのであります。即ち、『自己の職業を以て天職と心得るべきこと』この考え方は、嘗て、大阪ロータリークラブの北沢敬二郎パストガバナーが説かれたことでありまして、この考え方は、ロータリーにおける職業天職論と謂われているのであります。

ところで、今、自己の職業をもって天職と心得ている職業人が、一体どれ程いるのでしょうか。嘗て、バブルの時の職業人の天職を忘れた狂乱振りには、真に目に余るものがありました。多くの職業人が、自分の本職を忘れて、不動産や株やゴルフ会員権を買い漁ったことは、未だ記憶に新しいところであります。

17. 「ロータリーの目的」 その10

前回は、ロータリーの目的の第2の三つ目の項目は『自己の職業を以て天職と心得るべきこと』と規定していることを申しました。

そこで、ロータリーの目的の第2の二つ目の項目は、手続要覧では、『役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し』となっていますが、この翻訳では少し解り難いので、私は、小堀憲助先生の翻訳に従って、『職業に貴賤なしとの自覚を深めるべきこと』と理解しています。

即ち、自分の職業は自分にとって天職であります。そして、他の会員の職業は、他の会員にとって天職であります。天職と天職との間には、価値の相違はありません。したがって、零細企業であっても、私利私利を追求すると同時に、世のため人のためになる契機を孕んでいます。そのような自覚を持てば、大企業であれ、小企業であれ、また、社会的地位が高いと考えられている職業であれ、社会的地位が低いと考えられている職業であれ、天職と天職との間に差別があろう筈がありません。したがって、これは『職業に貴賤なしとの自覚を深めるべきこと』という具合になるのであります。

このように、ロータリーの目的の第2の二つ目の項目は、ロータリアンは『職業に貴賤なしとの自覚を深めるべきこと』と規定しているのですが、これは、ロータリーにおける均一的平等の原則と一脈相通ずる概念でありまして、世間一般では社会的地位が高いと考えられている人であっても、ロータリーの例会に参加する時には、社会的地位の低い人と平等対等の立場に立つのであります。

『職業に貴賤なし』全てのロータリアンが平等対等の地位に立ってお互いに何かのことを学びあうのであります。そのことによって、初めてロータリーというものが生きてくるのであります。

これは、『茶席の論理』と相通ずるものであります。即ち、茶席には、大名も入れば、武士も町人も入ります。社会のあらゆる階層の人達が入ってきますが、大名も武士も茶席に入る時には、必ず腰の刀をはずして丸腰で入ります。

そして、全ての人達と平等対等の立場に立って、静かに茶を喫して去る。これを『喫茶去』と謂います。これが茶席の論理なのであります。

これと同じように、ロータリーの例会にも、大企業の社長も入れば、零細企業の社長も入って来ます。医者も弁護士も入ってきます。あらゆる社会的地位の人達が入って来ますが、一旦、ロータリーに入れば、平等対等の立場でお付き合いをして心を通わせる、これがロータリーの論理なのであります。

ロータリアンは、ロータリーの例会に参加するときには、世俗の憂きことを忘れて、人の上に人を作らず、人の下に人を作らず、そのような純粹心の世界の中から純度の高い心と心とを通わせることが出来るのであり、これがロータリーであります。そして、これがクラブ奉仕の中核にある考え方なのであります。

18. 「ロータリーの目的」 その1 1

前は、茶席の論理を引用してロータリーの論理を説きました。これについて、桐生の或るロータリアンが謂いました。『ロータリーの例会は、ロータリアン達がお互いに神様になり合う時間である』と謂うのであります。多少当てずっぽうな表現ではありますが、真に正鵠を射た表現であると思います。

世俗の憂きことを忘れて、神様と神様との間には格差はありませんから、大企業の社長も零細企業の社長も、ロータリーの世界では、皆平等対等なのであります。これをロータリーにおける均一的平等の原則と謂うのであります。

これは、元来、優れてクラブ的な発想でありまして、クラブの会費というものは、クラブの必要経費を会員数の頭割りで割って各会員が均分に負担するというものでありまして、クラブの財産権を共有するが故に、発言権も平等となるのであります。したがって、30年在籍のバスターガバナーも、昨日入会したばかりの新会員も平等対等なのであります。これがクラブの論理であります。

そして最後に、ロータリーの目的の第2の最初の項目は、『職業上の高い倫理基準を保ち』と規定しています。これはロータリーの親睦論と関連概念になっているのでありまして、お互いに衆知を結集することによって、天職である職業の倫理基準を高めて行こうと謂うことであります。

以上を要するに、ロータリーの目的の第2は、ロータリーの奉仕をクラブの内と外に分けた場合のクラブの内の世界、即ち、奉仕の心を作る場面における親睦の実質的

内容を規定しているのであります。そして、これが将来に、ロータリーの職業倫理の中核を為すものなのであります。

次に、ロータリーの目的の第3は、『ロータリアン一人一人が、個人として、また、事業及び社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること』と規定しています。これは、ロータリーの奉仕をクラブの内と外に分けた場合のクラブの外の世界、即ち奉仕の実践の規定であります。

『ロータリアン一人一人が』と表現されているように、クラブで団体的に実践するのではなく、1人1人のロータリアンが実践しなければならないのであります。

団体奉仕のライオンズクラブの標語 Not I serve, but We serveではなくて、1人1人のロータリアンが、事業生活及び社会生活に奉仕の心を具体的な行動として実践しなければならないのであります。これが所謂個人奉仕であります。

ここで謂うところの社会生活には、地域社会生活と国際社会生活とが含まれます。したがって、奉仕の心を地域社会生活に適用するのが社会奉仕、国際社会生活に適用するのが国際奉仕、そして事業に適用するのが職業奉仕となります。

このようにして、ロータリーの目的の第3は、社会奉仕だけでなく、職業奉仕、国際奉仕を含めて、例会で作られた奉仕の心を実践すること、所謂「外なる奉仕」の全てについて規定しているのであります。

19. 「ロータリーの目的」 その12

前回は、ロータリーの目的の第3は、社会奉仕だけでなく、職業奉仕、国際奉仕を含めて、例会で作られた奉仕の心を実践すること、所謂「外なる奉仕」の全てについて規定しているということを申し上げました。

そして、ロータリーの目的の第1のクラブの内で、奉仕の心を作ることがクラブ奉仕であります。これが所謂「内なる奉仕」であります。

したがって、ロータリーの目的の第3は、社会奉仕に関する規定であるという考え方がありますが、この考え方は正しくありません。これは社会奉仕だけでなく、国際奉仕、職業奉仕を含めてロータリーの奉仕の実践全般に関する規定なのであります。

それは一体何故か、と謂いますと、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、クラブ奉仕という四大奉仕の考え方が開発されたのは、1927年のことでありますが、ロータリーの目的が原理的に完成した1922年時点では、未だ、現在で謂うところの社会奉仕とか職業奉仕とかクラブ奉仕という概念がなく、全ての奉仕を一括して、単に社会奉仕 Community service と表現していたからであります。

したがって、1923年の決議23-34号で謂うところの社会奉仕 Community service も、これは1927年以前のことでありますから、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、クラブ奉仕という全ての奉仕を一括して表現した未分化のものでありまして、地域社会奉仕だけを意味するものではないのであります。

要するに、ロータリーの目的の第3は、ロータリーの目的の第1と第2の親睦の世

界で作られた奉仕の心をもって、私達の生活全般に亘って奉仕の実践をするべきことを規定しているのであります。したがって、これは、「奉仕の実践」の規定であります。このようにして、ロータリーの目的の第1と第2は、奉仕の心を作る親睦の規定、第3は、奉仕の実践の規定なのであります。

そして最後に、ロータリーの目的の第4は、社会生活の内の、特に国際的な社会生活について、『奉仕の理念で結ばれた職業人が世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること』として、ロータリーの奉仕の実践活動のうち、特に国際奉仕の実践を規定しているのであります。これは、ロータリーの奉仕をクラブの内と外に分けた場合のクラブの外の世界、即ち、作られた奉仕の心を行動に移す実践の規定なのであります。

元来、一般的奉仕クラブの目的としては、第1に親睦によって奉仕の心を作る規定、第2に親睦によって作られた奉仕の心の内容の規定、そして第3に奉仕の実践の規定によって完結するのでありますが、ロータリーは、奉仕の心を提唱するばかりに、心というものが、地域社会の延長線上に国際社会をも包摂することが出来ます。その結果、第一次世界大戦を契機として、1921年に国際社会生活に奉仕の心を適用すると謂う国際奉仕の分野を開発したのであります。

20. 「ロータリーの目的」 その13

前回は、ロータリーの目的について、通常の奉仕クラブであれば、その目的は第1に奉仕の心を作る規定、第2に奉仕の心の内容の規定、そして、第3に奉仕の心を実践する規定によって完結するのでありますが、ロータリーは更に、1921年に国際社会生活に奉仕する分野を開発したということを申し上げました。

そして、その翌年の1922年、標準クラブ定款を採択するに際して、この国際奉仕をロータリーの目的の第4として付け加えたのであります。したがって、奉仕の実践に関する規定がロータリーの目的の第3と第4として二重に規定されることになり、これが原理の形に合わないようになっているのであります。

詰まり、第4の国際奉仕は、既に第3の奉仕の実践の社会奉仕の中に含まれておりますから、本来、規定する必要はなかったものであります。

しかし、ロータリーの奉仕哲学を突き詰めていきますと、国際奉仕というものは、人類平等の思想を広め、それをもって戦争の再発を防止し、人類の平和と繁栄に寄与するという大変重要な要素をもっていることを自覚するに至ったのでありますから、これはロータリーの奉仕の世界の終着点なのであります。

そこで、何とかしてこれをロータリーの目的に書いておく必要があると考えて、1921年のエディンバラの国際大会において、国際奉仕の概念を完成してこれを宣言し、その文言が、そのままの形でロータリーの目的の第4として付け加えられるに至ったのであります。

以上、申し述べましたところが、ロータリーの目的の概要であります。この目的をしっかりと心の中に植え付けていることがロータリアンとしての絶対条件なのであります。

そこで最後に、「ロータリーの目的」と「四大奉仕」との原理的な関係に触れておきます。

まず、この話の始めに申しあげましたロータリーの目的の基本原則を繰り返して申しあげますが、1910年当時の初期ロータリーは、ロータリーの奉仕をどのように考えていたのか、と謂いますと、クラブの内と外に分けて、クラブの内は、奉仕の心を作る親睦の世界、そして、クラブを一步外へ出ると、そこは、親睦によって作られた奉仕の心を行動に移す奉仕の世界であると考えていました。即ち、これは、ロータリーの奉仕の世界を、親睦と奉仕の二つに割った考え方でありまして、この考え方が所謂「奉仕の2分類法」と謂われるものであります。そして、これが実は、ロータリーの目的の基本原則なのであります。

ただ、この時点での奉仕というのは、世のため人のための奉仕全般をCommunity service 社会奉仕と謂っていたしましたので、今日のような社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、クラブ奉仕という四大奉仕の概念はなく、これらを全て引くくめて単にCommunity service 社会奉仕と謂っていたのであります。

21. 「ロータリーの目的」 その14

前回は、1927年までのロータリーの奉仕というのは、未だ、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、クラブ奉仕という四大奉仕の概念はなく、これらを全て引くくめて単に Community service 社会奉仕と称していたということを申しました。

四大奉仕の概念が出来たのは、1927年のことでありますが、原理的に見て、今日とほとんど同じようなロータリーの目的が出来上がったのは、1922年のロサンゼルス国際大会の時でありました。

時恰も、標準ロータリークラブ定款が採択された時でありましたので、ロータリーの目的もその定款に規定されることになったのであります。但し、今申し上げましたように、この1922年時点では、四大奉仕という考え方は未だありませんでしたので、国際奉仕の概念だけが例外的に、一般的な Community service 社会奉仕と併せて規定されることになったわけでありました。

そこで、以上に申し上げましたことを原理的に時系列に従って整理致しますと、先ず、奉仕の二分法法の考え方を下敷きにして、1922年時点で「ロータリーの目的」が原理的に完成しました。そして、この「ロータリーの目的」を下敷きにして、その翌年の1923年に奉仕の実践原理を規定した決議23-34号が出来上がり、更にその決議23-34号を下敷きにして、その4年後の1927年、その実践原理を具体的な行動に移すために、ロータリーの奉仕をクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の四つに分けて、原理を探求するロータリーから原理を実践するロータリーへと入っていったのであります。したがって、

これが所謂奉仕の四分法、即ち現在の四大奉仕部門となったのであります。

何はともあれ、この奉仕の四分法は、1927年に国際ロータリーが開発したロータリーの実践を中心とした分類法でありまして、今日のロータリー運動の基本を定めたものなのであります。

以上のようにして初期ロータリーにおける「実践原理の体系」が築き上げられて行ったと考えられるのであります。

なお、この関係は、一般に「奉仕クラブの目的」というものが原理的にサンドイッチ型をしていることから推測されるのであります。それは、一体どのようなことか、と申しますと、

元来、一般的奉仕クラブの目的としては、第1に奉仕の心を作る規定（サンドイッチの上のパン）、第2に奉仕の心の内容の規定（サンドイッチの具に当たる卵、ハム、野菜等）、そして第3に奉仕の実践の規定（サンドイッチの下のパン）によって完結するのであります。ロータリーは、第一次大戦後、国際奉仕をロータリーの目的の第4として付け加えたために、奉仕の実践の規定が第3、第4と二重（サンドイッチの下のパンが2枚）になりました。本来これは付け加える必要がなかったのであり、この点が原理の形に合わないのであります。

22. 「ロータリーの目的」 その15

前回は、元来、一般的奉仕クラブの目的は、第1に奉仕の心を作る規定、第2に奉仕の心の内容の規定、そして第3に奉仕の実践の規定によって完結するのでありますが、ロータリーは、第一次大戦後、国際奉仕をロータリーの目的の第4として付け加えたために、奉仕の実践の規定が第3、第4と二重になったためにこの点が原理の形に合わないということを申しあげました。

しかし、原理の形に合わないとしても、国際奉仕の概念は、ロータリーの奉仕の終着点でありますから、国際奉仕を重ねて規定したことによってロータリーの目的は完成体になったと謂えるのであります。

このようにして、ロータリーの目的は、1922年時点において原理的に完成されたものでありますから、例えば、「ロータリーの目的」の第4を改正して、環境問題などを入れるとか、青少年奉仕を第5の奉仕とするとか謂うのは、初期ロータリーが築き上げた素晴らしい原理の体系を崩してしまうことになるのであります。それは何故か、と謂いますと、環境問題は既に第3の社会奉仕の範疇に含まれており、また、青少年奉仕も同じく第3の社会奉仕の範疇に含まれているからであります。

もし、社会奉仕の範疇の中から青少年奉仕を取り出して第5の奉仕として独立の範疇を作るのであれば、高齢者奉仕も、身体障害者奉仕も、知的障害者奉仕も独立の範疇としなければ、原理的整合性がなくなってしまいます。

また、青少年奉仕は、社会奉仕の分野のみならず、国際奉仕の分野にもあり、また、職業奉仕の分野にもあります。この点の原

理的整理をどのようにするのかという問題もあります。

要するに、今回の規定審議会の改正によって、青少年奉仕を第5の奉仕としたことは、20世紀初頭の先人達が知性を結集して築き上げた素晴らしい原理体系を崩してしまったものと謂わなければなりません。

繰り返して申しますが、ロータリー創立の1905年から1927年までの間に確立されたロータリーの原理体系の核にあるものは一体何か。言い換えれば、この原理の体系を一言で集約すればどういう言葉になるか、と謂いますと、それは、ロータリーの中心概念である親睦と奉仕であります。

では、このロータリーの核にある考え方を原理の体系として集約して表現しているものは一体何か。それが将来に「ロータリーの目的」なのであります。

このようにして、「ロータリーの目的」というものは、ロータリーとは何か、ということを経験も般若心経のように簡明直裁に書き綴った素晴らしいドキュメントなのであります。したがって、「ロータリーの目的を知らずしてロータリーを語ることなかれ」ということになるのであります。

以上をもって、「ロータリーの目的」についての概説を終わります。

23. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その1

先日のクラブフォーラムでR Y L Aのことが話題になっていましたので、今日から暫くの間、R Y L Aの理論と実践と批判というようなことを話してみたいと思います。

まず、R Y L Aというのは、Rotary Youth Leadership Awardsの頭文字を取った略称であります。日本語に訳して青少年指導者養成計画と謂うのでありまして、ロータリーが提唱している青少年奉仕のプログラムの一つであります。

さて、ロータリーが青少年との関わりを持ったのは、かなり古いことでありまして、それはロータリーが作られて間もない頃のことでありました。

最初の物語としては、冬の寒い朝、シカゴの街角を通りかかったロータリアンが、新聞売り子の少年が新聞が一枚も売れないで困っているのを見て、この少年を助けたという話が残っています。誠に実に素朴で善意に満ちた物語であります。

このように、ロータリーは、当初、世の中の困った人を助けること即ち、弱者救済をもって奉仕と考えたのであります。

しかし、やがて、困った人を助けることだけが奉仕なのか、という反省がありまして、ボーイスカウトを育てるとか、ユースホステルを支援するとか、職業訓練所や身障者の養護学校を設立するとか謂うように、人を育てる方向への奉仕もするようになったのであります。

実は、この人を育てる奉仕の延長線上に、青少年奉仕の関係では1962年にインターアクトクラブが生まれ、1968年にローターアクトクラブが生まれ、そして、1974年にこのR Y L Aが生まれるに

至ったのであります。

ところで、ロータリーは、昔から、青少年を育てるために様々なプログラムを開発してきました。その中でも青少年の心を育てるという意味では、最もロータリー的なプログラムと謂えるものがこのR Y L Aなのであります。

このR Y L Aがロータリーの世界に初めて登場したのは、1959年、オーストラリアのクイーンズランド州創設100周年に当たって、ブリスベンロータリークラブがイギリス王女と同年代の青年男女を集めて、社会教育プログラムを実施したのが最初でありました。しかし、その後、R Y L Aは、鳴かず飛ばずの状態が続いた後、1974年、アメリカのワシントン州のタコマで開催されて以後、将に草原の野火のように全世界に広がって行ったのであります。

ところで、一口にR Y L Aと言っても、今、実際に各地域で行われているものには、様々な形態があります。その中でも、今から37年前に元R I理事の今井鎮雄先生が開発されたこの地区のR Y L Aは、その基本構想が、後に至って開発された国際R Y L Aの模範となったほど素晴らしいものであります。したがって、これは、様々なR Y L Aの中でも、殆ど完成されたタイプの一つであろうかと思えます。そこで今回は、先ず、基本構想から話に入りたいと思えます。

24. 「RYLA・その理論と実践」 その2

今日は、今井鎮雄先生が企画された当2680地区のRYLAの基本構想から話に入りたいと思います。

当地区のRYLAの今井先生の基本構想は、その核になるものが四つあります。

第1の核は、受講生に対するレベルの高い講義であります。

今井先生は、アメリカやオーストラリアのRYLAの資料を見ても、アメリカのオリジナルなRYLAは、18歳から24歳までの若者を対象としているが、これでは日本の状況にそぐわない。したがって、日本の状況に合わせた日本独自のものを作らなければ旨く行かないのではないかと考えられたのであります。

例えば、インターアクトについても、受験勉強などがあって旨くいかないのは、やはりアメリカとは少し社会の状況が違うからだ、と言われるのであります。

したがって、RYLAがRotary Youth Leadership Awards 即ち青少年の指導者を作るという講習会であるというのであれば、アメリカでやっているオリジナルなRYLAのように高校生を育てるというのではなく、青少年の指導者を育てるということを中心として考えようではないか、と謂うことになりました。

その結果、日本には、ボーイスカウトのリーダー、その他色々な青少年のリーダーが居ますが、そのリーダーを指導するリーダー、謂わば、リーダーのリーダー・指導者を作るということを条件にしようということになったのであります。

リーダーのリーダーを作る、言い換えると、日本には、ボーイスカウトのリーダーも

居る。ガールスカウトのリーダーも、青年団のリーダーも、子供会のリーダーも居る。色々な青少年団体のリーダー達が沢山居て、その青少年団体のリーダー達は、それぞれのリーダーの講習会で、皆それぞれに立派な指導者によって指導を受けています。

したがって、ロータリーがそれらのリーダーと同じようなリーダーを養成するというのは、屋上屋を重ねることになります。したがって、そのリーダー達がボーイスカウトやガールスカウトや子供会などにおいて、よりよい指導性を発揮してもらうためには、そのリーダー達を、世界的な視野でものを考えるような一段とレベルの高い指導者に育てるような指導者講習会にしようではないかと謂うことになったわけがあります。

謂わば、一般の指導者講習会よりもレベルの高い、リーダーのリーダーを作る即ち、ロータリーでなければ出来ないようなレベルの高い指導者講習会にしようということでもあります。

では、そのために何が必要か。先ず、リーダーの指導者になれるような人を育てるためには、一般の指導者講習会よりも、もう少しレベルの高い理論的な話、或いは内容的に深みのある話をしてくれる講師を選ばなければならない。したがって、講師には一流の先生を選ぼうということになったのであります。

25. 「RYLA・その理論と実践」 その3

前は、一般の指導者講習会よりも、もう少しレベルの高い理論的な話、或いは内容的に深みのある話をしてくれる講師を選ばなければならない。したがって、講師には一流の先生を選ぼうということになったということを申し上げました。

しかも、講師を選ぶときには、このRYLAが考えている或るビジョンというものを理解してくれる先生でなければなりません。

そして、受講生も、その先生の高いレベルの話が解り、自分の持っている問題意識をより深めていくことが出来るような講習会でなければなりません。

したがって、ただ単に、タレントを集めてきて講習会をすとか、大学教授を集めてきて講習会をすというのではなくて、このRYLAのビジョンに合った先生達で、しかも、レベルの高い先生達に来ていただいて、その先生達の話聞いた後でディスカッションをすれば、それが受講生達に或る方向性を示してくれるような、そういう講師の先生を選ぼうということになったのであります。

このように、レベルの高い講義でありますから、アメリカのオリジナルなRYLAのように、受講生の参加資格が18歳から24歳までというのでは、講義を消化する能力がないだろうというので、参加資格を20歳以上ということにしたのであります。

20歳以上としたのは、第1に、講義の消化能力の点からいえば、最低、大学の教養課程修了以上の学力が必要であるということと、第2に、RYLAでは、夜、皆で話し合ったりする時とか、夜眠れない時に、酒を飲むこともあるだろうから、その時に、

未成年者がいてはまずいということから、参加資格を20歳以上としたのであります。現実に過去の記録では、60歳近い人も参加しています。

以上のように、レベルの高い講義でありますから、RYLAは、受講生達の教育の場であるのみならず、実は、ロータリアン教育の場でもあります。現に私自身、RYLAでは大変多くのことを学ばせていただきました。以上が第1の核であります。

第2の核は、カウンセラーシステムであります。これは、このRYLAの重要な特色の一つであります。これは、どういうことかと言いますと、受講生にリーダーをつけるのではなく、カウンセラーをつけようということでもあります。

カウンセラーというのは、受講生が抱えている悩みとか問題を聞いてやって、カウンセリングが出来る人達のことです。ただ、このRYLAでは、プロのカウンセラーをつけるではありません。そこで、ロータリアンとロータリアンの奥様にカウンセラーになっていただきます。

何故、このことが大事か、と言いますと、このRYLAではレベルの高い講義を聴くことになりますが、それは、何故、ロータリーがRYLAを企画したのか、ということもロータリアン自身に解っていただくためなのであります。

26. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その4

前は、このR Y L Aでは、ロータリアンとロータリアンの奥様にカウンセラーになっていただくということを申しました。

それは、R Y L Aでは、受講生は、レベルの高い講義を聴くことにはなりますが、ただ単にレベルの高い話を色々な先生達にして貰っても、何故、ロータリーがこのR Y L Aを企画して、そのようなレベルの高い話を聞かせるのか、何故、ロータリーがR Y L Aを企画しなければならないのか、ということについては、ロータリアン自らが答えなければなりません。したがって、そのカウンセラーは、ロータリアン自らがやっていたと、ということになったわけであります。

したがって、受講生にとっては、一方ではレベルの高い話を聞き、他方では、ロータリアン及びロータリアンの奥様の人格を通して、ロータリーとは何か、ということが判るのであります。これが大事なところであります。

講師の先生達の話だけでなく、これが本当のリーダーのあり方なのだ、ということがカウンセラーの人格を通して受講生に判っていただくためには、その見本としてのロータリアン及びロータリアンの奥様が受講生達と三泊四日、寝食を共にして、指導していただくということが大事なことになるわけであります。

勿論、このことは随分大変なことであると思えます。今から37年前の第1回R Y L Aの時には、受講生の中でロータリーとは一体何か、ということが問題になったとき、皆、真面目な青年達でありましたから、「ロータリーというのは、ホテルで高い食事

をして遊んでいる老人のマスターベーションだろう、僕らは、そのようなロータリアンは信用しない」などという意見が出てきたのであります。

昔、バーナード・ショウが、「ロータリーよ何処へ行く。あれは、昼飯を食いに行くのさ」と皮肉ったのと同じ意識であります。

私達は、キャビンタイムで受講生と殆ど徹夜の議論をして、結局は、ロータリーの本来の在り方というものを判って貰ったのであります。兎に角、大変なことではありましたが。

要するに、受講生に、ロータリーが持っているイメージとか、理想というものを判って貰って、そして、受講生もまた、ロータリーが作ろうとする世界の平和とか、新しい地域社会の建設などというロータリーの理想を一緒に担って貰えることになれば一番よいのではないかと、というのが私達の願いでありました。

したがって、ロータリーのことについては、是非、ロータリアン自身に答えて頂きたいのであります。したがって、カウンセラーというものは、本来は、なかなか難しいものであります。このR Y L Aのカウンセラーは、プロのカウンセラーである必要はありません。また、受講生にカウンセリングの講義をして頂くわけでもありません。ロータリアンとロータリアンの奥様という資格で、その生の人格をもって、受講生とつき合えばよいのであります。

27. 「RYLA・その理論と実践」 その5

前回は、RYLAのカウンセラーは、ロータリアンとロータリアンの奥様が、ご自身の生の人格をもって受講生とつき合って頂ければよいと申しました。即ち、受講生達は、或る人はボーイスカウトのリーダーとして、或る人はガールスカウトのリーダーとして、或る人は子供会のリーダーとして、それぞれ色々な団体のリーダーとしてグループを預かっている悩みを持っていると思います。

そこで、キャビンでは、その悩みをお互いに話し合いながら、自分達で問題点を見つけ合って頂きます。そして、その問題を解決する場合に、カウンセラーが何らかのサジェスションを与えることが出来ればよいと思うのであります。

さて、このRYLAの第3の核は、親睦であります。何故、親睦が大事なのか。

それは、親しい人達の間では、お互いに悪口を言っても怒ることはありません。むしろ、親しみをもって受け止めることが出来ます。

しかし、親しくない人達の間で悪口を言えば、相手の人は怒るだろうと思います。したがって、同じ言葉であっても、お互い同士に信頼関係があれば、お互い同士の話は通じますが、信頼関係がなければ同じ言葉であっても喧嘩になる場合もあるということであります。

したがって、人と話をしたり、人の話を聞いたりするカウンセラーの仕事は、実は大変難しいのであります。

しかし、難しいことではありますが、そこで、大事なことは何かと言いますと、第1に、お互いがどれだけ相手のことを知っているか、ということ、そして第2に、そ

の相手との間にどれだけ信頼関係が出来ているか、ということ、が大事なのであります。

したがって、一番大事なことは、私達のRYLAの仲間がお互いに信頼関係をもつということであります。

したがって、RYLAの中の雰囲気がよくなるために一番大事なことは、カウンセラーの人達と受講生達との間、そして、ロータリアンと受講生との間に、本当の信頼関係があるかどうか、ということであります。したがって、大事なことは、カウンセラーも受講生もロータリアンも、皆がお互い同士信頼しあって、仲良くなるということであります。これがロータリーでいうところの親睦であります。

ロータリーの奉仕は、親睦に始まって親睦に終わるとも言われているのであります。世のため人のために何かをしようとするときは、先ず、皆が仲良くなるが一番大切なのであります。ロータリーは、この親睦のエネルギーをもって、世のため人のために動いていこうと謂うのであります。これがロータリーの奉仕の基本的な図式なのであります。

実は、ロータリーをはじめ各種団体の親睦が熟成するには時間がかかりますが、RYLAの親睦は一夜にして出来上がる、と謂われています。

28. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その6

前回は、ロータリーの親睦が熟成するには、ある程度の時間がかかりますが、R Y L Aの親睦は一夜にして出来上がる、と申しました。

それは、ロータリアンであるカウンセラーと受講生とが3泊4日、一つのキャビンで寝食を共にして、お互いにリーダーとしての悩みを打ち明け合い、お互いの発想に学び合うためであろうかと思えます。しかも、この親睦は、R Y L Aが終わったあとも、同窓会のような形で続いていくのであります。

このようにして、カウンセラーは、R Y L A終了後も、後々まで受講生達とお付き合いをしていただくわけでありますから、大変重要なお役目なのであります。将に、カウンセラーは、R Y L Aの花形なのであります。

私自身は、第1回R Y L Aの時は委員長であり、第2回以後はディーンをしていましたので、カウンセラーの経験はありませんが、今から37年前の第1回R Y L Aの受講生達のうちの何人かとは、未だにお付き合いが続いており、また、第2回以後の受講生の何人かとも未だに交流があります。以上がこのR Y L Aの第3の核であります。

そして、第4の核は、延々7時間に及ぶディスカッションであります。これは、最初の4時間はバズセッション、後の3時間はフォーラムという構成をとります。

元来、ロータリーのフォーラムは、通常は、長くても1時間半であります。このR Y L Aでは、バズセッションを含めて7時間のディスカッションをもって、徹底的に知性を錬磨するのであります。

何故、このような方法を採用するのか。と言

いますと、例えば、R Y L Aの受講生全員でフォーラムをしますと、発言する人は何回も発言しますが、発言しない人は一度も発言しません。また、長々と喋る人も居れば、すぐ終わる人もいます。

そこで、全ての人が万遍なく、必ず何らかの意見を述べる事が出来るように、受講生を4,5人ずつの小グループに分けて意見を述べ合います。これがバズセッションであります。これは、蜂などが羽をブンブン鳴らすことから、人がガヤガヤと話をするという意味のbuzzという言葉から名付けられた討論の形式であります。そして、この小グループの意見を集約して、今度は全体のフォーラムに持ち寄って、全体で討論するという方法であります。このような知的修練を積むことによって受講生のリーダーシップが高められて行くのであります。これが第4の核であります。

このディスカッションの結果、第3の核である受講生達の親睦も熟成されるのであり、この親睦は、受講生達がお互いに学び合う親睦、即ちロータリーに所謂精神的親睦であります。したがって、酒を飲んだり、歌を唄ったりする感性的な親睦ではありません。R Y L Aの本来の親睦は、精神的親睦なのであります。

以上が、今井先生が構想されたR Y L Aの核にあるものであります。

29. 「RYLA・その理論と実践」 その7

前回までは、今井先生が構想されたRYLAの核にあるものを紹介しました。

そこで、今日は、このRYLAを企画された今井先生は、どのような人であったのか、ということについて申し上げたいと思います。

先生は、1920年生まれ、同志社大学法学部を卒業後、灘購買組合、現在の生協COOP神戸を経て、1948年4月、神戸YMCAに勤務され、21年間総主事を務めた後、YMCAの顧問になられました。ほかにも公私に亘って沢山の仕事を兼務されておられましたが時間の関係で割愛します。

さて、先生の葬儀の前夜祭が昨年11月4日、東神戸教会で執り行われましたが、横山順一牧師は、「自分は、今年4月にこの教会に赴任してきたばかりで、今井先生のことについては詳しく知らなかったので、先生に「初めまして」と赴任の挨拶を申し上げたところ、先生は即座に「初めてではない」と仰った。

考えてみると、曾て自分が同志社大学の学生であったとき、アルバイトで西宮ブランチに来ていた時に、今井先生にお目にかかっていたことがあったようです。先生は、そのことを覚えていて下さったのです」と感動した面持ちで話されました。

このことは、人への愛情、人への思いやりがなければ出来ないことであります。人への愛情のある人であって、初めて人を理解することが出来るのであり、昔に会った人でもよく覚えていることが出来るのであります。このことは、人を指導する立場にある人にとっては、大変大事なことであると思うのであります。

今井先生は、このように人への愛情、人への思いやりということを中心に生きてこられた人でありました。

ところで、今井先生は、戦後日本で初めて肢体不自由児キャンプを手がけられましたが、身体障害者や知的障害者の問題にしても、その人達に対する深い愛情や思いやりの心なしには、その人達を理解し、育てることは出来ないと思うのであります。このように今井先生は、人を育てる人でありました。

今、申し上げた肢体不自由児キャンプが実施されたのは、このRYLAを開催している余島のYMCAの野外活動センターでありました。

実は、この余島というのは、今井先生が戦後間もなく少年のキャンプをするために見つけられた無人島でありました。無人島とは言いますが余島さんという人の所有で小さな家が一軒建っていました。しかし、人は住んでいませんでした。

そこで、先生は、この無人島で子供達とキャンプをしながら、何年もかけて、小豆島から電気を引き、水道管を引き入れ、建物を建て、色々な樹や草花を植えて、遂に冷暖房完備のホテル並みの素晴らしいキャンプサイトに作り上げたのであります。私は、この余島のRYLAで実に色々なことを今井先生から教わることが出来ました。その内の心に残った二三の話を次回から紹介致します。

30. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その8

今日から、元 R I 理事今井鎮雄先生から R Y L A で教わった感銘深い話の二、三を紹介したいと思います。

まず、今井先生は、敬虔なクリスチャンであられましたから、その心の根底にキリスト教思想があるのは当然であります。ロータリアンとしては、どのような思想の持ち主であったのか、について、ロータリーの標語に現れたロータリー思想の視点から推測しますと、自己犠牲の奉仕 "Service, Not self" の世界に生きた人であったと思います。

それは何故か、と申しますと、今から 37 年前の第 1 回 R Y L A が終わった時、今井先生と私は、食堂のロビーで一寸休憩していましたが、そこへ受講生達が自分の T シャツを差し出して、これに何か書いてほしいと揮毫を求めました。

今井先生は、即座に「身を捧げよ」と書かれました。流石はクリスチャンだ、と思いました。何故かと謂いますと、その言葉は、ロータリー思想の "Service, Not self" の思想を象徴的に表しているからであります。

身を捧げる、というその心は、自分の身を犠牲にして、ひたすら宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依すること、それがロータリーの奉仕である、と謂うのであります。それは、神に対して自己の存在を認めない、自己犠牲、自己否定、自己滅却の奉仕を意味する言葉でありまして、中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない、優れて宗教的色彩の強い思想でありました。

このロータリー思想は、1911年、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長ベンジャミン・フランクリン・コリンズ Benjamin Franklin Collins が提唱したもの

であり、爾来、初期ロータリーの歴代の指導者は殆どこの思想の持ち主でありました。当時は、アメリカ、イギリス、カナダというキリスト教国以外には、ロータリーがありませんでしたから、このことはむしろ当然のことでありました。

これに対して、コリンズの提唱から約 10 年後の 1921 年頃、シカゴ・ロータリークラブのアーサー・フレデリック・シェルドン Arthur Frederic Sheldon が、ロータリーは宗教ではないのだから、そのような宗教的色彩の強い標語は適切でないとして、"Service, Not self" のように自己を犠牲にする Not self ではなく、自己の上に、即ち、above self で奉仕を考えるべきだとして、実業倫理思想に基づく "Service above self" という考え方を提唱したのであります。そして、Paul P. Harris もまた、これに同調して、やがて "Service above self" がロータリーの公式の標語となるに至ったのであります。

では、"Service, Not self" の思想は、無くなったのか、と謂いますと、そうではなく、ロータリーの思想の世界は、色々様々な思想が共存しながら、しかも、お互いに他の思想を排斥することなく、全ての思想が恰も大河の如く滔々と流れて現在に至っているのであります。これがロータリー思想の潮流であります。

31. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その9

前は、今井鎮雄先生からR Y L Aで教わった感銘深い話として、今井先生のロータリー思想の話を致しました。今日は、青少年を育てる教育の話をします。

この話も、37年前の第1回R Y L Aで聞いた話であります。それは、『社会の動きと青少年の実態』というテーマの講義でありましたが、先生は、Paul Tillich という神学者の学説を引用されて、教育の三つの分野を説かれました。

第1は、Technical Education 技術教育。

第2は、Humanistic Education 人間がお互いに心豊かになろうという教育。

第3は、Inductive Education 人間とは何かという真実に招き入れる教育。

というのであります。

戦後日本の教育は、第1の Technical Education 技術教育一辺倒でありました。昔、ソ連が初めて人工衛星スプートニクを打ち上げた時、先を越されたアメリカは慌てました。そこで、大学に行くと100万\$儲かる、などと宣伝をして技術教育を奨励したのであります。

そして、日本も同じように、技術教育一辺倒になって、世界第2の経済大国を築き上げました。そこまではよかったです。

しかし、その結果どうなったか。人間は本来如何にあるべきか、ということを教える倫理教育・道徳教育を忘れたために、Humanistic Education と Inductive Education の分野が欠落してしまったのであります。

今井先生は、『戦後の日本では、技術教育ばかりに専念したために、人間として大切

なもの何か、ということではなく、人間には、どれだけの能力があるか、ということ計る試験第一主義の教育が横行していると言ってもよい。

しかし、世界的な視野に立ってみると、世界の状況は、人間個人に中心をおいて、一人ひとりの人間の問題を考えなければならない状況になっていると思われる。技術教育というものから、もっと人間を大事にする教育、所謂教育革命が世界の中に深く潜行してきたように思われる。にも拘わらず、日本の現実、未だ技術教育一辺倒のように思われる』と説かれました。これが37年前の話であります。そして、この状況は、基本的には今も変わっていないように思うのであります。

この Inductive Education というのは、人間とは何かという真実に招き入れる教育のことである、とは謂いますが、言葉自体があまりに抽象的であります。では、具体的には一体どういうことを意味するのか。

人間とは何かという真実、ということは、究極的には人間の生命に関わる問題であります。したがって、この問いかけについては、医学の立場からの意見もあり、また、宗教の立場からの意見もあろうかと思えます。しかし、事は、医学も宗教も超えた人間そのものについての問いかけなのであります。

32. 「RYLA・その理論と実践」 その10

前回は、人間とは何かという真実に招き入れる教育 Inductive Education という言葉について申し上げましたが、この言葉は、あまりに抽象的でありますので、それが具体的には一体どういうことを意味するのか、について申し述べます。

例えば、科学技術の発達によって医学は大変進歩しました。人間の幸せのためには、大変有り難いことであります。

しかし、医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされています。このことに思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。このことを一体どう考えるのか。

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物の命を奪ってもよいと考えるのか。しかし、彼らも神様から与えられた命を懸命に生きているのであります。その命を奪うことは罪ではないのか。もし、罪であるとすれば、その罪は、一体、誰が、何時、何処で、どのようにして償うのか。

元来、私達人間は、動物の命、植物の命、生きとし生けるもの全ての命を頂いて生きています。この生きとし生けるものの命を奪って生きていく人間とは一体何か。そもそも生きとし生けるものの命とは何か。

このようなことを青少年に問いかけていく教育の分野が、現在の教育体系の中に欠落しているのであります。

実は、このようなことを青少年に考えさせる教育を Inductive Education というのであります。将に、人間とは何かという真実に招き入れる教育であります。

青少年に、先ずこのような課題を与えて、彼らが成長していく過程において、一生涯

の課題として解決して行かせる教育、謂わば、人間とは何かという真実に招き入れる教育、これを Inductive Education というのであります。

では、そのことをもう少し具体的な事例について謂えばどのようなになるのか。

或る人は、未だ小学生の頃、人間が実験動物の命を奪っていることを理科の先生がポロポロと涙を流しながら話されたそうであります。その人は、未だ子供でありましたから、その時はどうすればよいか判らなかつたのであります。子供の時に問いかけられたその問題に非常に強い感銘を受けられました。

そしてその後、大人になってからも、その問題が心にあったそうではありますが、やがて、宗教の世界、禅宗に帰依するようになって、その問題を自ら解決した、と云っておられました。このように、子供に一つの課題を与えて、それをその子の一生涯の課題として考えさせ解決させていく教育、これもまた、人間とは何かという真実に招き入れる教育、即ち Inductive Education というのであります。

これは、優れて倫理的な教育であります。Inductive Education の世界は、将に倫理の世界の問題なのであります。そうだとすれば、これは倫理運動であるロータリーの問題であり、ロータリアン夫子自身の問題でもあるのであります。

33. 「R Y L A ・ その理論と実践」 その 1 1

前回は、人間とは何かという真実に招き入れる教育 Inductive Education の一つの態様として、子供に一つの課題を与えて、それをその子の一生の課題として考えさせ解決させていく教育のことも Inductive Education と謂うことを話しました。したがって、これは、優れて倫理的な教育であります。Inductive Education の世界は、将に倫理の世界の問題であります。そうだとすれば、これは倫理運動であるロータリーの問題でもあります。そして、大切なことは、この倫理の問題を青少年に問いかける場合に、先ずロータリアン自身がこの問題に取り組みなければ、若者達を育てること、人を育てることは出来ないということになります。

さて、Inductive Education の事例は、真に多種多様であります。

例えば、筋ジストロフィーという病気があります。筋肉がドンドン萎縮して行って、遂に死に至る病であります。昨年秋の卓話において大森英夫会員が、その主な病型と原因遺伝子について詳しく教えて下さいました。

ところで、或る筋ジストロフィーの少年が、あと2年しか生きられないことを知って、その2年間で一体何を勉強したらよいかということを或る教育専門家の先生に尋ねましたが、その先生は、答えることが出来なかったそうであります。「私達の教育は間違っていたのではないか」と述懐されたそうであります。

残された2年間の命で何を勉強すればよいか。今の世の中は、全てがあまりに技術的であり手段的であるために、何を勉強し

ても、2年で死んでしまったら意味がなくなってしまう。難しい問題であります。皆さん、考えてみてください。勿論、今すぐ答えを出すことは出来ないと思います。

一つのヒントとしては、Inductive Education 人間とは何かという真実に招き入れる教育というものを如何に考えるのか、という点にもあるようにも思います。

何はともあれ、この話は、私にとって大変ショッキングな話でありましたが、それから今日に至るまで、色々と考えさせられる話ではあります。

とは言え、筋ジストロフィーの少年に一体何と答えたらよいのか、ということは、やはり難しい問題であります。2年間という限られた時間で何を学ぶことが出来るのか。時間の経過と共に残された命は削られて行きます。時間の使い方は、将に命の使い方なのであります。

また、癌患者が、あと1年の命を勉強したいと言った時、現在の教育体系の中で、何を勉強せよと言えるのでしょうか。この問題も、世の中の全てがあまりに技術的であり、手段的であるために、1年で死んでしまったら意味がなくなるのであります。1年しかない命で学ぶものは何か。これに答える教育もまた Inductive Education と呼ばれるものなのであります。Inductive Education によって、初めて人は育つ、とも謂えます。何はともあれ、Inductive Education。この言葉は、私の心に強く焼き付いた言葉でありました。

「リーダーの心」－第37回RYLAセミナーにおける総括講義－

27.5.24

深川純一

いよいよRYLAの最終日となりました。皆さん、お疲れになったと思います。もう少しお付き合い下さい。今日は、去年の11月3日に亡くなられたこのRYLAの育ての親であった今井鎮雄先生の素晴らしいリーダーシップを偲びながら「リーダーの心」とでも謂うべきものについてお話し申し上げたいと思います。

実は、今から4年前の2011年の3月、神戸大学名誉教授の新野幸次郎先生がここ余島のRYLAに来てくださって、イギリスで最もよく読まれている雑誌の一つであるロンドン「エコノミスト」の記事を紹介して下さいました。

それによりますと、今から5年前の2010年6月、その「エコノミスト」に「リーダーレス・ジャパン」（リーダーの居ない日本）というテーマの論説が載りました。その内容は、鳩山元首相の幼稚性、菅元首相の自己決定能力なく権威あるものに従うという趣旨の記事であったとのことです。

そして、日本の雑誌「プレジデント」には、迷走民主党というテーマの論説が載ったとのことでありました。将に、当時の日本は、この時期にこそリーダーシップを如何に発揮するかということが問われていたのであります。

この時の日本は、冷静な判断力、明確なビジョン、そして一番大事な誠実さというものが日本のリーダーに問われていたので

あります。一国のリーダーにリーダーシップがないと国が減びます。

では、ロータリーは一体どうなのか。今、国際ロータリーは、真のリーダーシップが少しおかしくなって来たのではないか、とも思うのであります。

では一体どうすればよいのか。勿論、過去を顧みて基本に還るべきであります。

そこで、今、リーダーシップというものについて、人類文化史をグローバルな視点から眺めてみますと、人類が地球上に現れてから何万年か経っていますが、神様は、それぞれの時代に一つの民族に対して、全人類の幸せに貢献する使命を与えて下さっているようにも思うのであります。

例えば、紀元前5世紀までの古代バビロニア文明。これは紀元前5世紀に突如として崩壊するに至って、バビロニア文明の人類支配とそのリーダーシップは、この時をもって終わっているのであります。

次に、紀元前3世紀から紀元後3世紀にかけて隆々と栄えた古代ローマ帝国によるエンジニアリングを中心とする人類文化史の支配とそのリーダーシップ。

これも紀元後3世紀にローマの貴族が或る原因によって滅亡すると、それ以来、ローマ人は人類文化史に二度とリーダーシップを発揮したことはなかったのであります。

また、インド人も紀元後10世紀頃の歴史書を見ると、この地球上で一番正直で高潔な生活を送っているのは、インド人を

もって最高とするという記述があり、インド人もその頃、リーダーシップを発揮した時期があったのであります。

近世に至っては、スペイン、ポルトガル、イギリス、フランス、イタリア等のリーダーシップがあります。ただ、一点注意すべきことは、この時代には50年以上に亘ってリーダーシップを発揮した民族はなかったということでもあります。

ただ一つだけ例外がありました。それはイギリスでありました。イギリスは、18世紀から20世紀にかけて200年に亘ってそのリーダーシップを発揮して来ました。その原因は一体何か。

それは19世紀にグラスゴー大学のアダム・スミス教授が「国富論」という本を書きました。イギリスは、このアダム・スミスの思想によって自由貿易主義を採ったために、その後200年の長きに亘って栄えることが出来たと謂われているのであります。

今、ロンドンの至る所に素晴らしい建築物が残っています。バッキンガム宮殿、ウエストミンスター寺院、その他沢山の素晴らしい建築物が残っています。これは、彼らが如何に偉大なものを造って来たかを物語るものであります。

しかし、これらは全て過去のイギリス人の栄光の残骸でありまして、現在及び未来のイギリス人を語るものではないのであります。

では、日本はどうか。日本は戦後30年にして世界第二の経済大国を築き上げたのであります。その物質的繁栄に伴って、既に倫理の衰退が始まっていたことは御承知の通りであります。したがって、ひと度このリーダーシップを失うと、日本は二度と再びリーダーシップを発揮することは出

来なかりうと思うのであります。

では、その対策は何か。

まず、過去を顧みて日本が経済的に今日の大をなした原因を分析することです。そこから未来の展望も開けてくるのではないかと思うのであります。

では、その大を為した原因とは一体何か。それは、国民が正直であり、勤勉であり、そして学ぶ心を持っていたことでもあります。この三つが日本が経済的に今日の大をなした重要な原因なのであります。

そうだとすれば、日本の若い世代の人達がこれを失ったときに日本は国際競争力を失うに至ることになります。

何はともあれ、額に汗して働かない民族に繁栄はありません。曾て日本が世界第2の経済大国になったとき、豊かになって驕り高ぶった職業人が天職を忘れ、職業倫理を忘れて、バブルの崩壊で目が覚めたことは、未だ私達の記憶に新しいところであります。

学ぶ心を持つこと即ち、教育熱心であることが如何に大切か。

明治政府が教育を重視したことが日本の近代化の原動力となったことは明らかであります。このことは、司馬遼太郎の大作「坂の上の雲」を読めば一目瞭然に諒解されるところであります。

曾て、アジアが近代化を急いで失敗したのは、デモクラシーという精神的なバックボーンがない上に、工業化するための技術の知識もなかったからだと謂われています。

そこでアジアは、その後、再び基礎から近代化を進めましたが、その第一は、先ず教育に取り組むことでありました。その見事な成功例がシンガポールでありました。

この点について、参考になるのは、去る

3月23日、91歳で亡くなったシンガポールの元首相リークワンユーの話であります。

この人は、「シンガポール建国の父」と謳われた人であり、経済や企業経営について70年代から80年代にかけて日本を手本にしたのであります。

今から54年前、つまり約半世紀以上前、当時のシンガポールの厚生大臣リークワンユーは弱冠37歳でありました。しかし、物凄い愛国心に燃えていました。そして、『For the East』『東へ向こう』と言いました。

それは一体、何故か？「東には何があるのか。日本がある。日本を見習おう、そして、追いつき追い越そう」と言ったのであります。その当時、彼らが如何に日本を尊敬していたかが判るのであります。

「日本は原子爆弾の洗礼を受け、敗戦のどん底から立ち上がって、今、隆々と発展している。あの日本を見習おう」と言って頑張ったのであります。

そして、シンガポールは、学校の先生達を優遇し、建国の基礎に教育をおいたのであります。つまり、教育者を大事にしたのであります。

ところが、やがて30年くらい前から、シンガポールは、「日本を見習うのは止めよう。Not for the East日本の真似だけはするな」と言い出したのであります。

それは一体何故か。「戦後の日本の教育は、道徳や倫理を教えていない。日本は、知識を教える『知育』だけを大切にして、道徳を教える『徳育』を忘れている」彼らはそのことを切々と言うのであります。「人間教育の一番大事な時期である小学校では、人間教育としてあるべき姿を教えるべきであって、それを教える先生は、シンガポールでは大臣と同じ位に尊敬されている」と

いうのであります。

ところが、「日本は、戦後、道徳教育・倫理教育をしていない、このような国は将来必ず滅びる。したがって、Not for the East、日本の真似だけはするな」と謂うのであります。当時の首相リー・クワンユーによって、シンガポールは今もアジアで素晴らしいリーダーシップを発揮している数少ない国の一つになったのであります。

今、日本の最重要課題は何か。環境問題でも、経済問題でもなく、財政問題でもありません。それは、教育問題であり、倫理問題なのであります。倫理的な人間を育てること、特に、次世代に繋ぐ青少年を育てることのであります。

詰まり、教育は、国家百年の大計でありますから、これは、まさに民族の興亡に関わる問題なのであります。したがって、今、緊急の課題は、教育問題、特に青少年の心を育てること、人を育てることなのであります。だからこそ、ロータリーもRYLAを重視しているのであります。

これが次の世代に美しき土壌を残すための必須条件であり、リーダーたる者の心得るべきことのであります。

さて、RYLAというのは、Rotary Youth Leadership Awardsの略語でありまして、日本語で「青少年指導者養成計画」と翻訳されています。つまり、青少年の指導者・青少年のリーダーを養成すること、即ち、リーダーを育てることのであります。リーダーを育てる、ということは、要するに、人を育てると謂うことのであります。

では、「人を育てる」とは、具体的には一体どういうことなのか。

謂うまでもなく、ロータリーが人を育てる、というのは、人の心を育てることであ

ります。しかし、心は目に見えません。

では、心を育てる、とは一体どういう事なのか。目に見えない人の心を一体どのようにして育てるのか、という問題があります。

一つの問題を仮定します。例えば、私自身を育てるという場合、私は一体何処に居るのか、という問いかけであります。私の顔、私の頭、私の胸、私の身体、これらは皆目に見えます。では、「私そのもの」は一体何処に居るのか。私の姿かたちは目に見えますが、「私そのもの」は目に見えません。目に見えている私の姿は私の身体であって、「私そのもの」ではありません。

実は、私の姿・私の身体は、私という目に見えないものをこの世に存在させている仮の姿に過ぎません。これをギリシャ語では、「仮面」Personaと言います。古代のギリシャ人は、このようなことを考えていたのであります。この目に見えている仮面は所謂現象であり、目に見えない私というものがその本質であります。

この仮面の内に潜む「私」というものは、目に見えません。私の身体、私の姿は見えますが、「私」というものは目に見えません。この私というものの内に潜むもの、目に見えない私の魂、私の心と謂うべきもの、これが私の本体であります。昔のギリシャ人は、このように考えたのであります。

このギリシャ語のPersonaの最後のaを取ると、英語のPerson人という言葉になります。したがって、人というもの、人の身体は「仮面」であります。「仮面」は、人というものをこの世に存在させている仮の姿に過ぎない、将に現象に過ぎないのであります。

そこで、ロータリーが「人を育てる」ということの本体は何か、と言いますと、こ

の仮面である人の身体、肉体を育てることではありません。それは目に見えている現象の問題であります。ロータリーが人を育てるというのは、この仮面である身体の内にも潜む「内なる人」を育てるということにあります。これが本質の問題であります。ここに、現象にとらわれずに本質を見る、という考え方を看取ることが出来ます。人を育てるということは、「内なる人」即ち人の心を育てることなのであります。

昔の人は、「内なる人を強くする」という謂い方をしました。これが人を育てるということなのであります。

この「内なる人」という言葉には、三つの意味があります。

第1は、理性の意味であります。理性がないと、何が正しいかの判断が鈍り、過ちを犯します。

第2は、良心の意味であります。人間は、うっかりすると良心が鈍り、倫理が崩れます。

第3は、意志の意味であります。正しいことを実行する意志であります。

このような「内なるもの」を強くしていくことにより「人は育つ」のであります。そして、私達一人ひとりが育つこと、一人ひとりの人間的成長が社会改良のエネルギーになるのであります。これが、人を育てるロータリーの根本の考え方であります。

実は、この「内なる人を強くする」という言葉は、昔、親しいロータリアンのお父様が亡くなられて、キリスト教の葬式に参りましたとき、牧師さんのお話を聴いて強く心に残った言葉でありました。そのことによって私自身も少しは育てられたかと思うのであります。それ以後、私は、講演にも時々この言葉を使わせていただいています。

要するに、常日頃、学ぶ心があれば、自ら育つ機会はいくらでもあると思うのであります。葬式でお坊さんや神父さんに教えられることもあれば、酒を飲みながら友人や先輩に教えられることもあり、ロータリーやローターアクトで教えられることもあります。しかも、それは言葉だけでなく、時にはその人の一寸した立ち居振る舞いで教えられることもあります。その人の一挙手一投足から、将にこれこそ本当のロータリアンだ、ということをお教えされることもあります。

要は、いつも自分を高めようという意識を持つことが大切であろうと思います。これを自己啓発の心とも謂いますが、ロータリーでは、この心を自己研鑽の心と謂っているのであります。

文豪吉川英治の言葉に「吾以外皆師」というのがあります。自分以外の全ての人、皆、自分の先生である、というのであります。目上の人、目下の人、お金持ちも貧しい人も、全ての人、皆自分の先生である、というのであります。この謙虚な心が大切であります。

そして、この謙虚な心をもって、いつも人から何かを学ぼうという気持がなければ、何も教わることは出来ないと思います。

「正師に見ゆること難し」という言葉があります。正師とは、自分の一生涯をかけた真の先生のことです。

私達は、この世に生を受け、やがてこの世を去るその時に到るまで沢山の人の人に出会います。しかし、長い人生の中で、この人こそ自分の生涯をかけた真の師、即ち、正師であると信ずる人に出会うことは非常に難しい、というのであります。仮に、出会ったとしても、その人を正師だと見抜く眼力

がなければ、すれ違ってしまって、永久に出会うことは出来ません。このことを「正師に見ゆること難し」正師に出会うことは難しい、と謂うのであります。

ただ、正師に出会うことは難しいとしても、私達は、生涯、沢山の人の人に出会います。その出会いを大切に、何時も人から何かのものを学ぶ心を持っていることが大切であります。そうすれば、何時か正師に出会うことも出来るのであります。

また、「正師に見ゆること難し」という言葉との関連で言えば、「人の生は偶然、死は必然」という言葉があります。この言葉の具体的な意味内容については、色々な解釈があるかと思いますが、私なりの理解を申しますと、「生は偶然」という言葉は、真に含蓄のある言葉であろうかと思えます。例えば、私の父親の何億という精子の中の唯一つの精子が母親の一つの卵子と出会って、今の私があるのでありますから、もし他の精子が母親の卵子と結ばれたらならば私は生まれなかったわけであり、詰まり、私は何億分の一の可能性の一つであったわけであり、したがって、私は、両親に出会うことは極めて難しかったわけであり、将に、親に見ゆること難し、でありました。そして、そのことは、私の父についても祖父についても、そして、全ての祖先についても謂えることでもあります。そして、同時にそのことは、私の子についても、孫についても、そして全ての子孫についても謂えることでもあります。将に、偶然の出会いが未来永劫に繋がっているのです。したがって、人の命は大切にしなければならぬのであり、生まれた人を大切に育てなければならぬと思うのであります。

ところで、リーダーというのは生身の人間でありますから私達の目に見えていま

す。しかし、その人のリーダーシップ（指導力）というものは目に見えません。

したがって、リーダーには、リーダーシップのある人も、リーダーシップのない人もいます。リーダーにリーダーシップのない組織は、発展しません。時には滅びることさえあります。

そこで、凡そ組織の長たる立場にあるものは、須くリーダーシップを身に付けなければならないのであります。

では、どうすればリーダーシップを身に付けることが出来るのか。

それには、色々様々なことが考えられます。色々な本を読むとか、沢山の人の話を聞くとか、様々な仕事を体験するとか、色々な娯楽を楽しむとか、色々ありますが、これを一言で言えば、要するに、自己研鑽に励み、切磋琢磨に努めることであろうかと思えます。

その結果、リーダーシップが身に付くこともあれば、身に付かないこともあります。そして、真のリーダーシップが身に付いたかどうか、ということは自覚できないものであります。人を指導する立場に立ったからといって、直ちにリーダーシップがあるとは限りません。その人にリーダーシップがあるかどうかということは、他人が見て解ることであり、社会が判断することであり、

何はともあれ、リーダーシップが身に付くことについて、ロータリーでは、昔から感動のないところにロータリーはない、ということが謂われています。

確かに感動によって人は育つということ、よく経験するところでもあります。そこで、私が心から敬愛する二人の先輩に感動によって育てられた体験を披露しておきた

いと思えます。

一人は、西宮ロータリークラブの執行孝胤パストガバナーであり、一人は、このRYLAの創始者である神戸西ロータリークラブの今井鎮雄パストガバナーであります。

まず、執行孝胤パストガバナーの話を行います。執行先生は耳鼻科のお医者さんでありまして、今も、あれこれ思い出は尽きませんが、本当に心の温かい人でありました。私が理想のロータリアンとして尊敬している所以であります。

先生は、37年前に第1回RYLAが始まった時の地区ガバナーでありました。その時のガバナーとしての見事なリーダーシップは、昨日のこのように鮮烈な印象として私の記憶に焼きついています。その二、三の事例を紹介しておきます。

特に感動的であったのは、最後の夜、フォーラムが食堂で開かれましたが、フォーラムの前に「Around the corner」という映画が上映されました。

世界の国々をテーマとした素晴らしい映画でありましたが、その映画が終わったその直後、突然、執行ガバナーが、『皆さん、部屋の灯を全部消して真っ暗にしましょう』と言って真っ暗なホールの中央に立たれました。そして、マッチを擦って一本のマッチを灯されました。先生の顔だけが明るく照らし出されました。そして話し始められました。

『皆さん、今、このマッチの火は私の顔しか照らしていません。さあ、皆でマッチを灯して下さい。もっと明るくなるでしょう』皆が一斉にマッチを擦りました。皆のマッチの火で皆の顔が明るく照らし出され、ホール全体が明るくなりました。そして次のように説かれました。

『一本のマッチの火はそれぞれ小さいけれども、それが沢山集まれば皆が明るくなります。これが私達の仕事なんです。私達が灯すのは、大きな松明でも何でもない、本当に小さな、小さなマッチの火のようなものであるかも知れませんが、そのことによって私達は、この世の中を明るくして行こうとしているのです』と。

誠に感動的な場面でありました。

後で、このことについて先生に聞きしましたところ、『映画のあとの暗がりにはアメリカの俳優ダニー・ケイの演出を思い出して、咄嗟にそれにならったまでだよ』と謙遜しておられましたが、それにしても、映画のあとの感動がまださめやらぬ内に、その感動を更に印象づけるために、咄嗟の機転でこのような行動に出て、ロータリーの原理を説かれたわけであります。私は、マッチの火に照らし知らし出された先生の姿に真のロータリアンの姿を見る思いがしたのであります。私は、この感動的な場面に居合わせて、その年度の国際ロータリー会長クレム・レヌーフのことを思い出していました。

クレム・レヌーフは、その年、1978年、世界で初めて3Hプログラムを提唱していました。(3Hは、Health Hunger Humanityの略語)それは良かったのでありますが、何故、3Hプログラムを提唱したか、という理由付けが振るっていました。即ち、「全世界のロータリアンが、個人奉仕で鉄砲をポンポン撃つような奉仕では大したことは出来ない。したがって、例えば、百人のロータリアンが持っている百丁の鉄砲を国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、より大きな奉仕が出来るでしょう。だから全世界のロータリアン

の皆さん、国際ロータリーに寄付をして下さい」と説いたのであります。

これは、一見、真に説得力があるかに見えます。しかし、ロータリーの根本原理に反すること著しいものなのであります。それは一体何故か。皆さん、ここは大事なところであります。ロータリーの第一義に関わる場所であります。

まず、個人奉仕を鉄砲に例えること自体が間違っていますが、仮に個人奉仕が鉄砲だと仮定しても、そもそもロータリーは、未だ曾て百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を持ったことがないのであります。これは将来ライオンズクラブの団体奉仕の発想であります。

ロータリーの発想は何か。それは、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、百丁の鉄砲のそれぞれ一丁ずつの鉄砲をそれぞれ一門の大砲に育てる、と謂うのであります。そうすると、百門の大砲が出来上がります。これが個人奉仕を標榜するロータリーの中核にある考え方なのであります。

したがって、執行先生の示されたマッチの火の譬えは、一見、団体奉仕の提唱のように見えますが、その心の根底には、若者達のそれぞれ一本ずつのマッチの火をRYLAやロータリーを通して、やがて地域を動かし、世界を動かしていく大きな奉仕の火に育てて行こうという個人奉仕の心があるのであります。

ただ、ここで、人を育てるために大事なことは、ライオンズの発想を非難してはなりません。ロータリーを良しとし、ライオンズを非難することは「ロータリーの寛容の精神」に反します。この世の中にとっては、ロータリーもライオンズも、どちらも

大切なのであります。己を善しとし、人を貶すようでは、人を育てることも、自ら育つことも出来ないと思います。

何はともあれ、執行先生にはカリスマ性がありました。このことは、リーダーとして大事なことであります。それは単に先生の風貌だけから来るものではないと思います。先生は生涯に10回以上も腸の開腹手術をされました。常に命の危険にさらされておられたのであります。にも拘わらず、診察に、そしてロータリーにと元気に走り回っておられました。その強靱な精神力と生命力、殊に手術後の日常の肉体的な痛みを一切態度に出されずに平静を装っておられたその凄まじいまでの精神力、そして、いつも相手のことを思う温かい心、そのようなものが渾然一体となった魅力から来る、そのようなカリスマ性であったと思うのであります。

カリスマ性とリーダーシップということを考えますときに、リーダーは、何時も「自分一人ではない」、ということ忘れてはならないと思います。

リーダーは、自分を磨くこと、自己研鑽に努めなければなりません。しかし、自分を磨くことだけ、自分を向上させることだけを考えているようでは、本当のリーダーとは謂えません。人を育てることも自ら育つことも出来ないと思います。難しいことではありますが、何時も自分と共にいる人のために役立つことを考えなければならないと思うのであります。

ロータリーの第一義は親睦であります。ロータリーの世界には、お互いに心の通じ合う仲間がいます。自分一人ではありません。したがって、自分だけが自己研鑽、自分を磨いて立派になるのはエゴイストであ

ります。他人のお陰で自分がある。したがって、他人も立派になって貰うように心がけなければなりません。これがロータリーの謂う個人奉仕の本来の在り方なのであります。したがって、皆で切磋琢磨することが大切なのであります。自己研鑽だけでは人は育たないのであります。皆と共に立派になろうという気持ちを忘れてはなりません。

ここにクラブとかRYLAというものの存在意義があります。皆で共に磨き合うのが個人奉仕であり、個人主義であります。個人主義は利己主義とは異なるのであります。

このことは、芸の世界にも通じることであります。

例えば、昔の歌舞伎役者坂田藤十郎の芸談があります。彼は、弟子の舞台を観て、「自分だけが光っているようでは駄目だ。そこには本当の芸はない。自分だけが光り輝こうとする自分だけがある。これでは芝居全体が駄目になる」といって厳しく弟子を戒めています。

自分だけが立派になるのは、利己主義であって個人主義ではありません。常に、全体があってその中の自分であることを忘れてはならないのであります。

少し古い話ではありますが、今から7年前の2008年3月27日、NHKテレビで放映された「にっぽん紀行」"春"～安城・芸妓達の門出～を観ました。その要旨を抜粋しますと、安城の芸妓を育てる置屋「かすみ寮」の経営者である女将「佐藤かすみ」の話であります。

自分が育てた「駒子」という芸妓を一流の芸者に育て上げ上げましたが、その駒子がいよいよ置屋の女将として独立するときには駒子に諭した言葉があります。

「自分だけが芸を磨いて一流になっても

駄目ですよ。それでは置屋の女将は務まりません。これからは、お前一人の身体ではありません。芸妓達を育て上げる義務と責任があります。「芸妓が在って初めて女将が在る」ということを忘れてはなりません。

そのためには、先ず芸妓達にとって居心地の良い置屋にしなければなりません。したがって、芸妓達に優しく、何時も「思いやりのある心」をもって育てなさい。それが結局、自分を育て、自分を大きくすることになり、芸妓も自分も立派になるのです」と謂うのであります。

正に、人間とはそういうものであります。人間とは間柄の関係であります。「他人があって自分がある」。人と人との間の関係がなければ人間とは謂えないのであります。

最近の自殺、子殺し、親殺しなどは、将に間柄の関係が無くなったことを示しています。

「駒子」の話に戻ります。駒子が最初の新弟子を迎えたとき、その子は、駒子の前に座りましたが、最後まで駒子に話し掛けることはありませんでした。何故かと言いますと、駒子の絶対的な存在感、完璧さ、そしてカリスマ性に圧倒されて、何も言うことが出来なかったのであります。

駒子としては、その子が話し掛けるのを待っていたと謂いますが、それは無理であります。新弟子は、何をすべきかも判らなかつたのであります。

駒子は、この場合、自分のカリスマ性とか、雇い主であるとか、大先輩であるとか、新弟子が先ず自分に挨拶をするのが当然だとかいうような全てのプライドを捨てて、一人の人間として、一人の女性として、新弟子と対等の立場に立って駒子の方から話

かけてやるべきでありました。このような「こだわりのない心」が、置屋の女将として新弟子を育てていく要諦であります。

「こだわりのない心」をもって、詰まらぬプライドを捨て、一人の生身の人間として新弟子とつき合う心がなければ、新弟子も心を開かないし、仲良くもなれません。したがって、置屋の「親睦」も育ちません。新弟子を育てることも先ず親睦からなのであります。

先ずは、置屋の雰囲気を変えて、新入りか心を開いて稽古に打ち込めるような雰囲気を作らなければなりません。これは、ロータリアンにもロータリークラブにも、そして、RYLAの皆さんにも国際ロータリーにも謂えることであります。ここにも親睦を第一義とするロータリーの考え方があるのであります。

次は、このRYLAの創始者今井鎮雄先生の話に致します。

実は、今井先生は、昨年11月3日、93歳で亡くなりました。私は、このRYLAで今井先生の感動的な話を色々聞くことが出来ましたので、少しは育てられたかな、とも思うのであります。

そこで、先ず、第1回RYLAにおいて今井鎮雄先生から教わった感銘深い話を紹介しておきます。

一つは、『社会の動きと青少年の実態』というテーマの講義でありましたが、先生は、Paul Tillichという神学者の学説を引用されて、教育の三つの分野を説かれました。

第1は、Technical Education 技術教育。

第2は、Humanistic Education 人間がお互いに心豊かになろうという教育。

第3は、Inductive Education 人間とは何かという真実に招き入れる教育。

というのであります。

戦後日本の教育は、第1の Technical Education 技術教育一辺倒でありました。昔、ソ連が初めて人工衛星スプートニクを打ち上げた時、先を越されたアメリカは慌てました。そこで、大学に行くと100万\$儲かる、などと宣伝をして技術教育を奨励しました。

そして、日本も同じように、技術教育一辺倒になって、世界第2の経済大国を築き上げました。そこまではよかったです。

しかし、その結果、人間は本来如何にあるべきか、ということ教える倫理教育・道徳教育を忘れたために、Humanistic Education と Inductive Education の分野が欠落してしまつたのであります。これは、先ほど申し上げたように、シンガポールのリー・クワンユー首相の指摘したところでもあります。

これでは、「内なる人を強くする」という教育の本質にある「人作り」は出来ません。教育とは、教え育てる、と書きます。「育てる」ということは、本来は、「育む」ということであります。したがって、Humanistic Education と Inductive Education というものを忘れてはならないのであります。

今井先生は、『戦後の日本では、技術教育ばかりに専念したために、人間として大切なものは何か、ということではなく、人間には、どれだけの能力があるか、ということ計る試験第一主義の教育が横行していると言つてもよい。

しかし、世界的な視野に立つてみると、世界の状況は、人間個人に中心をおいて、一人ひとりの人間の問題を考えなければな

らない状況になっていると思われる。技術教育というものから、もっと人間を大事にする教育、所謂教育革命が世界の中に深く潜行してきたように思う。

しかし、日本の現実は、『未だ技術教育一辺倒のように思われる』と説かれました。そして、この状況は、基本的には37年後の今も変わっていないように思うのであります。

この Inductive Education というのは、人間とは何かという真実に招き入れる教育のことではありますが、それは具体的には一体どういうことか、と言いますと、例えば、科学技術の発達によって医学は大変進歩しました。人間の幸せのためには大変有り難いことでもあります。

しかし、医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされています。このことに思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。このことを一体どう考えるのか。

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物の命を奪つてもよいと考えるのか。しかし、彼らも神様から命を与えられて懸命に生きているのであります。その命を奪うことは罪ではないのか。もし、罪であるとすれば、その罪は、一体、誰が、何時、何処でどのようにして償うのか。

元来、私達人間は、動物の命、植物の命、生きとし生けるもの全ての命を頂いて生きています。この生きとし生けるものの命を奪つて生きていく人間とは一体何か。そもそも生きとし生けるものの命とは何か。

このようなことを青少年に問いかけていく教育の分野が、現在の教育体系の中に欠落しているのであります。

一昨日、命と謂うことについて、千代豪

昭先生からは、医学の立場から素晴らしい話を伺いました。そして、山口徹先生からは、クリスチャン今井鎮雄先生の法脈に繋がる人として、「いのち」と「命」という視点から素晴らしいお話を窺いました。そして、私は、仏教徒として、人間の命だけでなく、生きとし生けるもの全ての命の問題を問いかけていますのであります。即ち、一木一草に到るまで命が宿っていると考えているのであります。

実は、このようなことを青少年に考えさせる教育を Inductive Education というのであります。将に、人間とは何かという真実に招き入れる教育であります。

青少年に、先ずこのような課題を与えて、彼らが成長していく過程において、一生涯の課題として解決して行かせる教育、謂わば、人間とは何かという真実に招き入れる教育、これを Inductive Education というのであります。

私は、この Inductive Education という言葉に強い感銘を受けましたので、その後、私のロータリーの恩師、中央大学の小堀健助先生にこの言葉について、更に詳しく具体的に教えて頂きました。

小堀先生は、小学生の時、人間が実験動物の命を奪っていることを理科の先生がポロポロと涙を流しながら話されたそうであります。小堀先生は、未だ子供でありましたから、その時どうすればよいか判らなかったそうではありますが、子供の時に問いかけられたその問題に非常に強い感銘を受けられました。

そしてその後、大人になってからも、その問題が心にあったそうではありますが、やがて、宗教の世界、禅宗に帰依するようになって、その問題を自ら解決した、と言っ

ておられました。

このように、子供に一つの課題を与えて、それをその子に一生涯の課題として考えさせ、解決させていく教育、これもまた、人間とは何かという真実に招き入れる教育、即ち、Inductive Education というのであります。

これは、優れて倫理的な教育であります。Inductive Education の世界は、将に倫理の世界の問題であります。そうだとすれば、これは倫理運動であるロータリーの問題でもあります。そして、大切なことは、この倫理の問題を青少年並びに R Y L A の受講生達に問いかける場合に、先ずロータリアン自身がこの問題に取り組まなければ、若者達を育てること、人を育てることは出来ないということであります。

要するに、このような Inductive な教育によって、初めて人は育つのであります。技術教育だけでは人は育たないのであります。

ところで、皆さん、筋ジストロフィーという病気はご存じのことと思います。筋肉がドンドン萎縮して行って遂に死に至る病であります。

この筋ジストロフィーの少年が、後2年しか生きられないことを知って、その2年間で何を勉強したらよいかということを或る教育専門家の先生に尋ねましたが、その先生は答えることが出来ませんでした。「私達の教育は間違っていたのではないか」と述懐されたそうであります。

残された2年間の命で何を勉強すればよいか。今の世の中は、全てがあまりに技術的であり手段的であるために、何を勉強しても、2年で死んでしまったら意味がなくなってしまう。難しい問題であります。皆さん、考えてみてください。勿論、

今すぐ答えを出すことは出来ないと思います。したがって、ゆっくり考えてみてください。

一つのヒントとしては、Inductive Education 人間とは何かという真実に引き入れる教育というものを如何に考えるかと、いう点にもあるようにも思います。

何はともあれ、この話は、私にとって大変ショッキングな話でありましたが、それから今日に至るまで、色々と考えさせられる話でもあります。

とは言え、筋ジストロフィーの少年に一体何と答えたらよいのか、ということは、やはり難しい問題であります。2年間という限られた時間で何を学ぶことが出来るのか。時間の経過と共に命は削られて行きます。時間の使い方は、命の使い方であります。

また、癌患者が、あと1年の命を勉強したいと言った時、現在の教育体系の中で、何を勉強せよと言えるのでしょうか。この問題も、全てがあまりに技術的であり、手段的であるために、1年で死んでしまったら意味がなくなるのであります。1年しかない命で学ぶものは何か。これに答える教育もまた Inductive Education と呼ばれるものなのであります。

何はともあれ、Inductive Education。この言葉は私の心に強く焼き付いた言葉でありました。

この他にも今井先生とのお付き合いで、強く心に残っている言葉があります。

皆さんご存じのように、昨日キャンプファイヤーを焚いたカウンスルリングと呼ばれる儀式の火を焚く所があります。第1回のRYLAの時も、ここで、キャンプファイヤーが焚かれたのでありますが、折悪しくその時は暴風が吹き荒れていました。後

で解ったことではありますが、この日、全国で死者行方不明15名、負傷者169名という被害がありました。

何故、そのような暴風の中でキャンプファイヤーを焚いたのか。山の頂は特に風当たりが強かったので、キャンプファイヤーは、風裏になる浜辺で焚くことも出来ました。また、食堂の中で焚くことも出来ました。

しかし、今井先生は、RYLAのディーンとして、敢えてこのカウンスル・リングで焚くことを決断されたのであります。それは一体何故か。今井先生は、

「儀式の火を焚くというカウンスルリングを持つてる青少年団体は少ないので、一つのシンボルとしてここを皆に見て貰いたい。暴風の中だからキャンプファイヤーの演出としては失敗するかも知れない。しかし、その中に或る種の意図というものを学んで頂ければ結構だ」と言っておられました。

受講生にリーダーの心というものを感じ取って貰うために、敢えて暴風の中でキャンプファイヤーを焚くことを決断されたのであります。このことは、青少年のリーダーを育てるために大事なことであると思うのであります。

今井鎮雄先生は、第1回のRYLAを初めとして、何時もキャンプファイヤーを囲みながら感動的な話をされましたが、その中で特に印象的な話として薪の話があります。

それは、キャンプファイヤーが終りに近づいて、皆のドボルザークの「新世界」のハミングが終わった時、今井先生が若者達とフレンドシップサークルを組み、ほのかな火の明かりに照らされながら、このセミナーのディーンとして、静かに若者達を論

された言葉は非常に印象的でありました。「キャンプファイヤーの間、私達をあかあかと照らし、温かさを与えてくれた火もようやく消えかかっています。私達は、この薪を通して三つのことを学びました。

第1は、薪は一本では燃えない。最初に、薪が組みたてられたように、それぞれが協力していなければ、火はあかあかと燃えないのです。

第2は、その薪は、今、見るように、すっかり崩れ落ちてしまっています。私達に光を与え、熱を与えてくれるために、一本一本の薪は、灰になってしまっています。世の中に光を与える奉仕は、それなりの時間と労力とその他の良いものを犠牲にしなければならぬのです。

第3に、この決意と協同があっても、運んできたトーチによって火がつけられるように、一つの目的が明確でなければなりません。ここに来て、ロータリーの火がつけられ、諸君の奉仕の心と共同の作業がある時、キャンプファイヤーのように周囲をあかあかと照らすことが出来るのです」と。

私達の心に強く残った話でありました。

今井先生は、世のため人のために光を与える奉仕は、それなりに自分の時間と労力その他の良いものを犠牲にしなければならない、と説かれました。詰まり、自己犠牲の奉仕の心がリーダーの心でもある、と説かれたわけでありました。

実は、今井先生が、自己犠牲の奉仕の世界に生きた人であったということは、図らずも、この第一回 R Y L A の終わったときに知りました。

それは、今井先生と私が食堂のロビーで休憩していたとき、数人の受講生達が自分のTシャツを差し出して、揮毫を求めたの

であります。

先生は即座に、「身を捧げよ」と書かれました。流石はクリスチャンだと思いました。これは、ロータリーの奉仕の考え方の中でも最も厳しい立場、自己犠牲の奉仕即ち、Service, Not selfの世界を象徴している言葉であるからであります。

これは、リーダーの心として忘れてはならない言葉であります。"Service, Not self"は、自己犠牲の奉仕でありますから、宗教の世界にある言葉であります。これは、自分を犠牲にして、この宇宙を支配する神の秩序体系の下に帰依すること、それがロータリーの奉仕であるというのであります。したがって、神に対して自分の存在を認めないこと、自分 self を否定する・犠牲にする、即ち、Not self がロータリーの奉仕である、という極めて宗教的色彩の強い言葉であります。

しかし、これに対しては、ロータリーは宗教ではないのであるから、自己否定、自己犠牲はおかしい、ロータリアンは職業人として厳然と自我 self をもっているのであるから、自己否定ではなくて、自我の上に、即ち above self で奉仕を考えるべきであるという考え方もあり、"Service above self" 自己研鑽の奉仕という言葉が現在のロータリーの標語になっています。

なお、"Service, Not self" という言葉は、三木パストガバナーが御自分のメールナンバーとして使っておられますが、これは三木先生のロータリーに対する傾倒の深さを示すものであります。

さて、最後に、リーダーがリーダーとして先人の古き時代の伝統を守りながら、新しい時代に即応した新しい伝統を作り上げていくとき、即ち伝統を創造して行くとき

に参考になる話であろうかと思えます。

これは命の使い方の問題でもあります。実は、この話は先程申し上げました中央大学の小堀健助先生に聞いた話であります。

14世紀初頭のイギリスに"Fleeta"という本がありました。この"Fleeta"というのは、ラテン語でありまして、これを英語に訳すと、Fleet manであります。そしてFleetというのは或る監獄の名称でありますから、"Fleeta"というのは謂わばFleet監獄の或る囚人という意味であります。

実は、14世紀に或る政治犯であるとの嫌疑を受けて有罪の判決を受けた国王の裁判所の裁判官が居ました。その名前は全く判りません。囚人のことでもあり、また、古い時代のことでもあり、しかも当時はその人に対する反感が強かったので、その人のこの世における実名は今日に到るまで伝わっていないのであります。この裁判官は、政治犯として起訴されて裁判所の判決は死刑でありました。何か誤判事件でもやったのかも知れません。

ところで、イギリス法における裁判官は、日本と違って地位が非常に高いのであります。世俗的な階層秩序によれば、神様の次が裁判官、裁判官の次が国王、詰まり国王の良心を握っているのが裁判官であるという考え方ありますから、裁判官になったということは、如何に立身出世の道を登りつめたかということの意味するのであります。その裁判官が死刑の判決を受けたのであります。

そこで、その裁判官は、自分は何時死刑を執行されるかも判らない。しかし、今日、自分は法律家として生きている。自分は裁判官になろうと思ひ定めて一生懸命に勉強した。そして、遂に登り詰めて、国王の裁

判所の裁判官にまでなった。しかし、そのことがきっかけとなって、結局死刑の判決を受けた。そして、地獄へ墮ちる。そこで、その最後の日が来る前に、自分が今までに蓄えてきたイギリス法の原理の全体系、これを書き留めてからあの世へ行きたい、というので、彼は願ひ出まして、イギリス法の原理の体系を書き出したのであります。

恐らく監獄の管理者がその気持ちに同情したのであらうと思われまゝ。そして、その全てを書き終えて死刑が執行されたのであります。

そして、その記録が現在残されていまして、誰が書いたのか判らないのであります。が、"Fleet"監獄の中で書かれたイギリス法の体系的な解説書でありますから、この本のことを"Fleeta"と呼んでいるのであります。

兎に角、誰が書いたのかは判らないが、或る裁判官が死刑を執行される前に書き上げた中世イギリス法の集大成なのであります。これは真に素晴らしいものでありまして、"Fleeta"は、その後、今日に到るまで、どの偉大な裁判官が書いたものよりも権威のある法理論の解説書として扱われるようになったのであります。

ところが、その後19世紀になってから、もう一つの発見がありました。それは、13世紀の中頃にBlacktonというエクゼターの修道院の院長が居ましたが、この人は、国王の裁判所の裁判官をした人でありまして、【イギリス王国における法律と慣習について】という素晴らしい本を書いています。

ところが、19世紀になって、13世紀に書かれていたこの本が中世イギリスのCommon Law 即ち、国王の裁判所が創

り上げたイギリス法の体系 (cf.Equity) の最も純度の高い集大成であると謂うことが判ったのであります。

ところが、この14世紀に書かれた "Fleeta" 80%が実は13世紀に書かれた Blackton の本の表現と全く同じだということが判りました。Blackton は13世紀、"Fleeta" は14世紀であります。したがって、"Fleeta" は約50年余り後に書かれたものであります。

このことを一体どのように考えたらよいのか。

"Fleet" 監獄における裁判官は、監獄の中で書いたのでありますから傍には本も参考資料も何もないところで、自分の頭の中にピシッと入っていた法理論を将に怨念の如く書き綴って行ったのであります。そして、書き終わって死刑が執行されて、彼の命は絶たれましたが、本が残りました。そして、それを読んだ人達は感動して、これこそ将に法のバイブルだと謂って長い年月が経ったのであります。

そして、その後何百年か経った19世紀の中頃になって、"Fleeta" の80%がこの Blackton の本と同じだと判った。即ち、Blacktonの方が50年古いということが判ったとき、"Fleeta" は Blackton の亜流であって人のものを真似たのではないかと考えられます。

ところが、イギリスの法学界は、そのような判断を採っていないのであります。"Fleeta" の裁判官は徹底的にこの Blackton の本を読みこなして、完全に自家薬籠中のものとして、即ち、それが自分の血となり肉となりながら、更にその上に自分のものが約20%付け加えられるものがあつたことによって、彼の本の權威性は

些かも侵害されずに、今日、イギリス法学会で認められているのであります。

詰まり、Blackton の中の13世紀のイギリスの国法の純度の高い解説、それと、"Fleeta" の中の14世紀のイギリスの国法の純度の高い解説、そこに相違を認めることが出来るのであり、そこに、本当の意味における獨創性・創造を見ることが出来るのであります。

このようにして、"Fleeta" の物語というのは、悲惨な劇的な出来事ではありましたが、人間が古来の保守・伝統に学ぶべきことを教えているのであります。したがって、先ほどの松本幸四郎の息子達のように「俺の思うとおりのものが創造である。今までのは駄目だ」などというのは真の創造にはならないのであります。私達は、謙虚に頭を垂れて先輩の道に学ぶところがなければならない、という結論になるのであります。したがって、この話は、私達が先人の創造した伝統を守り、新しい時代に即応した伝統を築き上げていく上で肝に銘ずべきことであろうと思うのであります。

さて、そこで、この二つの物語から私達が学ぶべきことは何か。総括しますと、

この二つの物語は、いずれも物事を創造し発展させるためには、先ず、物事の基本をしっかりと身につけるべきことを説いています。これは、曾て世阿弥が「初心忘るべからず」と説いたことと共通の境地にあるものと思うのであります。

先ず、先人の創造した伝統を正しく創造・発展させるためには、物事の基本をしっかりと身につけなければなりません。

"Fleeta" の裁判官の差し迫った限られた命、その命の使い方は将に時間の使い方であり、怨念の如く書きつづった文章が

人々に感動を与え、彼の命は絶たれたけれども、彼の開発した優秀な思想は永遠に語り継がれることになりました。これもまた命の尊さを示すものであります。

"Fleeta"の裁判官は、最後は、囚人としてこの世を去りましたが、彼の命をかけた執念が、イギリス法学界を指導する法の原理体系を作り出したのであります。

先ほどの筋ジストロフィーの少年の2年間という限られた時間に何を勉強すればよいかという Inductive Education、人間とは何かという真実に招き入れる教育というものを考える上で何かの参考にでもなればとも思います。

以上、リーダーの心とも謂うべきことを主題にして、命との関わり合いをお話申し上げました。最後は、少し重い話になってしまってお疲れになったと思います。お許し下さい。これで終わります。御静聴有り難うございました。

あ と が き

14年目を迎えてお贈りする「純ちゃんのコーナー」、年に一度の発刊ですが日本ロータリーの歴史や目的が、Part XIVに解説されております。また、伊丹クラブが力を入れているRYLA(青少年指導者養成計画)についての理論と実践も解説いただいております。

総括では、ロータリーの根本的な考え方は「人を育てる」「人の心を育てる」と教えてくださってます。企業の重責を担うトップの方々は、人生やビジネスにおいて揺るぎない信条を持ちだと思われれます。同様にロータリーにおいても自分の目標や生き方を大切に、ロータリー3分間情報を今後のロータリーライフにお役立ていただければ、これに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、ご執筆いただきました深川純一先生に深く感謝申し上げますとともに、いっそうのご健勝を心よりお祈り申し上げます。そして前年度会長山地秀俊会員、幹事榊井俊司会員、事務局の皆様方にご尽力を賜り発刊に至った事を心より御礼申し上げます。

2015年 10月 雑誌・ロータリー情報委員会

